

KOBE STUDIES #6



あの頃の神戸で

見たこと、体験したこと

神戸スタディーズ #6

“KOBE”を

語る

GHQと神戸のまち

私たちが語ります。

GHQ占領期の 神戸の暮らしを 学び、語り合う。



戦時下の神戸については、これまで長い時間をかけて少しずつ解明されてきました。

しかし、戦後の神戸にGHQ (General Headquarters=連合国占領軍) が駐留していたことや、その時期の暮らしに関する記憶は、十分には語り継がれておらず、いまだ知られていないことが多くあります。

その主な理由は、神戸には当時の状況を記録した資料が限られてきたこと、そして、戦後の暮らしや“進駐軍”について語られる機会がなかったことにあるでしょう。

2016年には神戸スタディーズ#4として、“KOBE”のイメージを解し、まちの痕跡や人々の暮らしから神戸のまちを捉えなおす企画を実施しました。

神戸スタディーズ#6では、GHQ占領期の神戸のまちについて、日米の記録史料をもとに位置づけ解説するレクチャーと、実際にここに暮らした方々が語りあう公開ヒアリングを行いました。

神戸スタディーズ #6
"KOBE"を
語る
GHQと神戸のまち



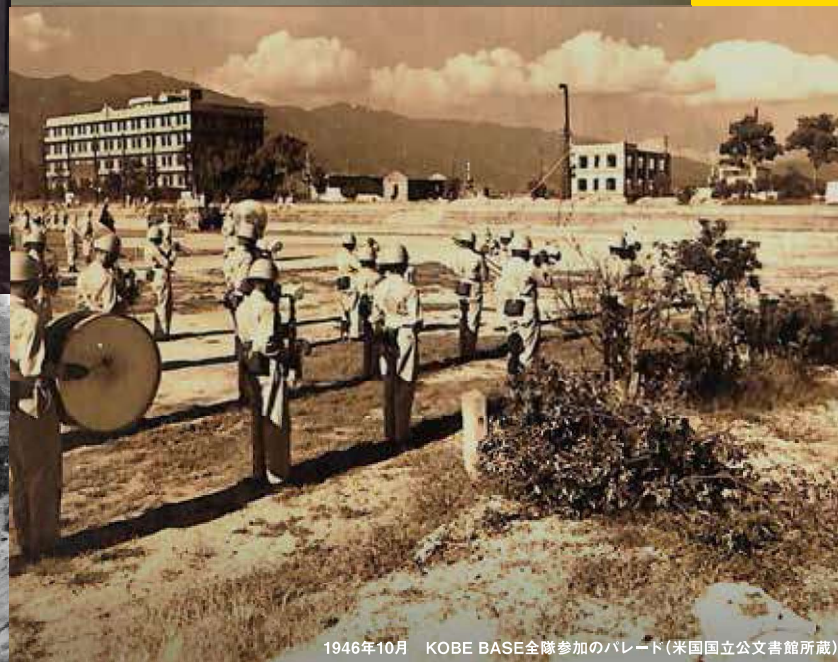
1950年6月 新開地本通りに立つ米国人女性 (Lafayette College所蔵)



戦後占領期の三ノ宮駅に置かれたR.T.O (Rail Transportation Office)
(U.S.Army Soldier撮影, Hiro Nagano所蔵)



1946年 ジュラルミン街の建設途中 (衣川太一所蔵)



1946年10月 KOBE BASE全隊参加のパレード (米国国立公文書館所蔵)



1950-55年頃 阪急三宮駅南から仕事現場に向かう労働者
(神戸市文書館所蔵)



1956年頃 接収解除になつた三宮駅南側 (そごう神戸店所蔵)



1950-55年頃 三宮町1丁目の路地 (神戸市文書館所蔵)



1946年 帰国前の若い米兵(ローランド)と
17歳の豊田和子さん(左)

開催概要

神戸スタディーズ#6

「“KOBE”を語る—GHQと神戸のまち」

第1回：レクチャー「GHQと神戸のまち」 2018年1月13日(土)

第2回：公開ヒアリング 1月27日(土)

主催：デザイン・クリエイティブセンター神戸

協力：JSPS科研費 若手研究(B)「占領期神戸における都市空間の変容過程に関する研究」(16K21163, 代表者：村上しほり)

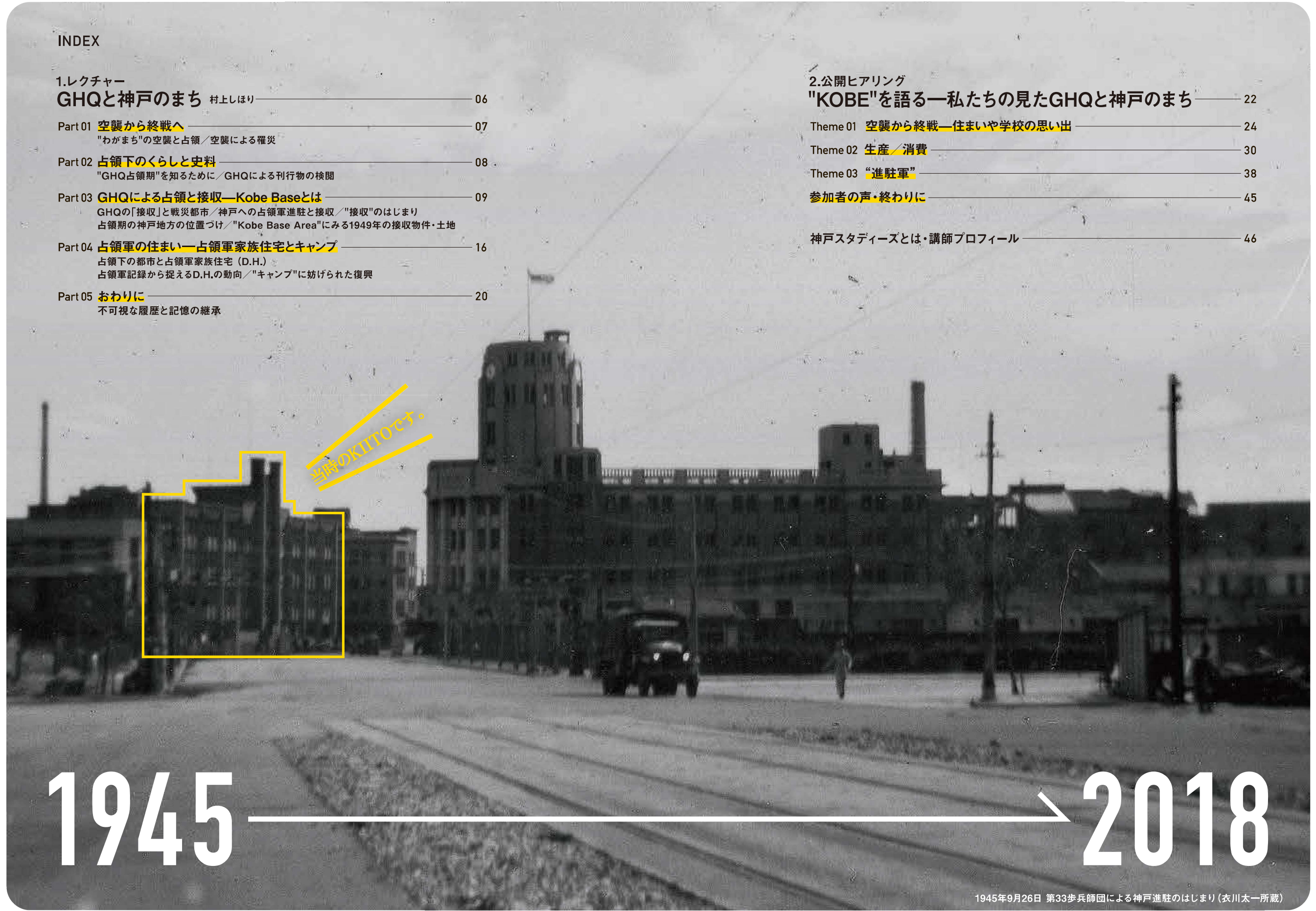
INDEX

1. レクチャー

GHQと神戸のまち 村上しほり	06
Part 01 空襲から終戦へ "わがまち"の空襲と占領／空襲による罹災	07
Part 02 占領下のくらしと史料 "GHQ占領期"を知るために／GHQによる刊行物の検閲	08
Part 03 GHQによる占領と接收—Kobe Baseとは GHQの「接收」と戦災都市／神戸への占領軍進駐と接收／"接收"のはじまり 占領期の神戸地方の位置づけ／"Kobe Base Area"にみる1949年の接收物件・土地	09
Part 04 占領軍の住まい—占領軍家族住宅とキャンプ 占領下の都市と占領軍家族住宅 (D.H.) 占領軍記録から捉えるD.H.の動向／"キャンプ"に妨げられた復興	16
Part 05 おわりに 不可視な履歴と記憶の継承	20

2. 公開ヒアリング

"KOBE"を語る—私たちの見たGHQと神戸のまち	22
Theme 01 空襲から終戦—住まいや学校の思い出	24
Theme 02 生産／消費	30
Theme 03 “進駐軍”	38
参加者の声・終わりに	45
神戸スタディーズとは・講師プロフィール	46



1945



2018

1.レクチャー

GHQと神戸のまち

村上しほり



講師：村上しほり



1945年9月25日、空襲を受けて焼け野原となった神戸にGHQが駐留を始めました。三宮駅南側には広大なイースト・キャンプが置かれ、焼け残った建物は接収されました。第1回ではGHQ占領下神戸の実態、当時の日本における神戸の位置づけなどを講師が語りました。本稿はレクチャーの内容をまとめなおしたものです。

Part 01 空襲から終戦へ

“わがまち”の空襲と占領

「GHQ」と聞いて私たちが思い浮かべるものはそれぞれだろう。第二次世界大戦後の日本各地に駐留したGHQ (General Headquarters=連合国占領軍) のイメージは、十分に語り継がれたとは言い難いし、戦後73年目を迎えようとするいま知られているGHQについての情報は、その大半が東京や横浜にまつわるものではないだろうか。地方都市に暮らしている人びとが「わがまち」の占領軍とどう関わったのかは、伝承も十分にされていなければ、多くは記録すら、個人の手記にわずかな言及を見つげられる程度だ。

空襲による罹災

神戸における占領の実態を考えるにあたり、終戦時の神戸がどのような状況にあったかは大きく関連している。戦災を受けた大都市であった神戸市民は、空襲によってそれまでの住まいや家族が失われたり、離れた土地への疎開を余儀なくされたり、疎開から帰ることを制限されたり、さまざまな変動に見舞われていた。

終戦時の神戸市内は、1945年上半期に米軍による128回もの空襲を受け、市街地の6割以上もが焦土と化した状況にあった。都市に対する無差別焼夷弾爆撃は3月10日の東京大空襲を皮切りに本格化し、名古屋、大阪に引き続き、神戸への爆撃が始まった。

3月17日未明に西神戸を中心としたエリアへの無差別焼夷弾爆撃、5月11日には東灘区にあった航空機工場を目標とする精密爆撃が行われ、6月5日には垂水区から西宮まで広いエリアへの無差別焼夷弾爆撃によって焼け残っていた東神戸も壊滅的な被害を受けた。当時の神戸市域の罹災状況は、戦災家屋数14万1,983戸、罹災者53万858名、死者7,491名、負傷者1万7,014名に上り、これは、六大都市においても最大の人的被害であった¹。



①：日本地図株式会社作成の「神戸市戦災焼失区域図」(1946年6月)に現在の神戸市の行政区画を加筆

1946年6月に刊行された①「神戸市戦災焼失区域図」を見ると、当時の神戸の中心市街地であった兵庫区から現在の中央区、灘区西部辺りの罹災が激しく、特に、旧生田区と旧葺合区の区界に位置する三宮から元町にかけては隙間なく焼失していたことが見てとれる。この図は1945年12月に第一復員省資料課が作成した「全国主要都市戦災概況図」を基にしたと見られ、おそらく最初期に制作されたものである。

神戸市の戦災被害を示す地図は複数種類あり、それらが示す焼失区域はやや異なっている。しかし、いずれの地図も、そして戦後に日本人やGHQ関係者に撮影された写真を見ても、三宮一帯の焼失は明らかだ②。木造建築はことごとく焼かれ、かろうじて残されたのは昭和初期に完成したそごう百貨店や鉄道高架橋と駅舎、旧居留地などの堅牢な鉄筋コンクリート造建築物と、立地により空襲を免れた山手の邸宅などだった。



②：1945年12月10日
三宮の焼け跡(米国立公文書館所蔵)

Part 02

占領下のくらしと史料

“GHQ占領期”を知るために

GHQ (General Headquarters=連合国占領軍)による占領期とは、第二次世界大戦後、ポツダム宣言調印の1945年9月2日からサンフランシスコ平和条約が発効した1952年4月28日までの7年弱を指す。この時期には、戦後復興や日本国憲法施行(1947年5月3日)などの国内の復興に向けた動向のみならず、米ソの冷戦体制が強まるなか朝鮮戦争の開戦(1950年6月25日)に際して占領軍の方針や部隊編成もシフトするなど、さまざまな政治・経済・社会の大変動が生じた。

しかし、占領軍の間接統治下に置かれた日本における都市空間の変容過程の具体的な状況や占領軍に接収された土地・物件等の実態は、全国的に不明点が多い。この調査・研究を進める動きは近年高まりつつあり、すでに都道府県文書の公開がなされた都市では、占領期に駐留した占領軍と地方政府の渉外の記録や接収の経緯を追った成果が生まれている²。一方、公文書の公開が不十分な地方都市では、解明がきわめて難しい。神戸市内の占領軍との渉外の記録が含まれるはずの当該期の兵庫県庁文書は、京都府や大阪府や滋賀県に後れ、未だ公開されていない現状にある。

都道府県文書や外交史料で不足する情報は、米公文書、国内の地方紙、雑誌・書籍、多様な日本人やGHQ関係者や外国人が撮影した写真・映像、そしてリアルタイムに残された手記や現在かろうじて得ることのできる体験談の聞きとりなどから補完しうるだろう。占領軍の動向を調べるに際し、GHQ/SCAP (Supreme Commander for the Allied Powers=連合国最高司令官)による対日司令(SCAPIN=SCAP Index Number)や覚書等は重要な情報である。ただし、戦後都市における「占領」は、その始まりの時点からベストな方針が定まっていたわけではなく、問題が起きれば対処的に細かな指示や注意が出された。特に、占領初期の各地に進駐した占領軍は現地の状況を見ながら柔軟に対応していたことが、これらの多様な史料の情報を照らし合わせると、浮かび上がってくる。

GHQによる刊行物の検閲

戦後、占領期にも検閲があったこと、新聞に報じられなかったトピックがあったことをご存知だろうか。

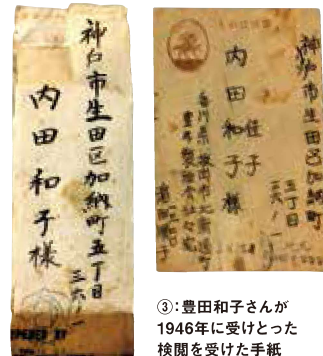
神戸に占領軍が進駐を始める直前の1945年9月21日には「日本出版法」が即日施行された。これに基づき、1945年9月から1949年まで、日本国内におけるすべての出版物に対して、連合国占領軍民間検閲部(Civil Censorship Detachment, CCD)による検閲が行われた。

筆者は、当時の神戸のまちに現れたさまざまな主体の動向を明らかにするための史料として、終戦前から1950年までの『神戸新聞』の全紙面を読み、調査して検討に用いたが、その報道もまた検閲対象であったはずだ。なお、この調査の結果、新聞では進駐当初より「阪神進駐米軍」を縮めて「進駐軍」と記していたことが読み取れた。

日本出版法の内容からは、占領軍に対する「破壊的批評」「不信」「怨恨」、公式に発表されていない動静を報じることを禁じられていたことがわかる。つまり、この期間の新聞報道は占領軍の検閲を受ける前提で記されており、内容を鵜呑みにしてはいけい。それが事実かどうかを、記事の文脈から判断したり、新聞以外の史料にもあたって確かめたりする丁寧な姿勢が必要と言えよう。

また、同年10月12日に通信検閲も始まり、何でもない子どもの手紙までも開封され^③中身を検めたくうえで印が押されて、手元に届けられた。

GHQ占領期を知るための史料	
公文書	日本(国、都道府県、市町村) 米軍(GHQ部隊記録、寄贈コレクション等)
新聞	1945~1949年GHQ (民間検閲支隊,CCD)による刊行物の検閲
雑誌・書籍	1945~1949年GHQ (民間検閲支隊,CCD)による刊行物の検閲
写真	日本・米軍 —— 多様な撮影者と所蔵者
映像	米軍
手記、体験談の聞きとり、遺物など	〈各地域で現在進められている〉



③: 豊田和子さんが1946年に受けとった検閲を受けた手紙

Part 03

GHQによる占領と接収

—Kobe Baseとは

GHQの「接収」と戦災都市

1945年の秋、日本各地にGHQは駐留を始めた。神戸市内にも、9月25日から2週間で1万1000人もの兵士が入ってきた。それだけ多くの占領軍兵士が、部隊の移動などで出入りしながらも、1952年4月に占領期が終わるまで約7年に及んで生活していた。ここでお気づきだろうか。どこで暮らしていたのか、と。多くの人が暮らすには土地や建物を要する。つまり、占領の始まりには、これまで日本人が使っていた場所・空間を占領軍に差し出すことが求められた。これを「接収」という。

既に空襲や戦時体制によって暮らすスペースを奪われたなか、終戦を迎え、人々は生活再建に向けて動き始めていた。そこにやってきた占領軍は、焼け残った近代建築や公的な機能のために使われていた建造物、キャンプを設営するためのまとまった広さの土地などを接収する指令・指示を出した。

私たちは、なぜGHQの実態を知らないのだろうか。短い期間に新たな現象を引き起こしていった存在で、後の時代から振り返る際には、混乱期に起きた「過渡的」な現象と総括されがちだ。しかし、そのために使われた土地や建物はクリアになったとは限らず、むしろ原状回復せずに従前あった要素や記憶を变移させてしまった例が多くあった。その一例として、戦後神戸のまちとGHQの関わりを見てみよう。

神戸への占領軍進駐と接収

神戸における占領期の始まりは1945年9月25日と言える。近畿地方への占領軍進駐は、この日午前8時に米第6軍の主力約1万人が、^④和歌山市の二里ヶ浜へ大型輸送船で海から上陸したことに始まる。

進駐予定のおよそ半数の8,000人余りが鉄道・道路で神戸方面へと向かい、午後5時10分から11時過ぎまでに三ノ宮駅に5列車で到着したのち、翌日にかけて東西の宝塚駅、姫路駅、西宮駅にも計5列車が着き、第33歩兵師団の兵士たちがそれぞれの宿舎に入った。三ノ宮駅に着いた兵士たちの宿舎は、神戸海運局(税関)、旧生糸検査所、神港相互館、大丸百貨店などの旧居留地付近のビルで、警備兵を配して後続を待った。揚陸されたトラックの輸送部隊(約700人)も1週間にわたり神戸、姫路にトラックやジープで到着し、1945年10月15日までに、1万1,000人の兵士が神戸に進駐を始めた。



④: 1945年9月25日 和歌山市の二里ヶ浜に上陸した米軍の大型輸送船(衣川太一所蔵)

“接収”のはじまり

^⑤進駐開始翌日の1945年9月26日、「神戸基地」司令部が神戸海運局(税関)に設置された³。しかし、1946年6月になると頻発する密貿易の徹底的な取締りのために神戸税関が再開され、同司令部は旧居留地の神港ビルに移転することとなる。焼け残った堅牢な建築物が集まる同ビル周辺の旧居留地を中心に、戦災ビルと港湾施設が長期にわたって接収された。

続いて、各地の占領軍は駐留、宿営するための環境整備を行った。占領軍将校と家族のた



⑤: 1945年9月26日 第33歩兵師団による神戸進駐のはじまり(衣川太一所蔵)

めには暮らすに堪える住宅などを接收する必要があったため、灘区から中央区にかけて焼け残ったホテル、次に阪神間の個人所有の住宅が多数接收された。神戸の接收住宅は県下の7割以上を占め、⑦塩屋の「ジェームス山」の約60戸を代表に阪神間の山手の邸宅など122戸が接收された。しかし、戦災都市で日本人の住居も不足する状況のなか、既存の建築ストックは十分には確保できず、⑧「六甲ハイツ」として現在神戸大学の六甲台第2キャンパス(文理農学部)に225戸が新築で建設された。

ただし、この接收住宅で暮らすのは一握りの高級将校とその家族であったことを指摘しておきたい。神戸に進駐した1万人の兵士のうち高級将校約350人が十分な設備の接收住宅に住まい、それ以外の占領軍兵士は焼け跡の土地を接收して設営されたキャンプの「かまぼこ兵舎(Quonset hut)」に暮らしていたのだ。三宮のそごう南側(旧葦合区御幸通、磯上通、浜辺通の大部分、磯辺通の一部)約31万㎡に置かれたイースト・キャンプと新開地本通の東側(兵庫区古湊通・西多間通、生田区相生通ほか)約10万㎡に置かれた⑨キャンプ・カーバー(ウエスト・キャンプ)が、神戸における兵士たちの宿营地となった。



⑦-1: 1950年6月 塩屋ジェームス山の接收住宅に暮らす夫妻 (Lafayette College 所蔵)



⑧: 1948~49年頃 灘区の六甲ハイツ (衣川太一所蔵)



⑨: 1946~47年頃 新開地のマーケット営業と隣接するキャンプ・カーバー (U.S.Army Soldier撮影, Hiro Nagano所蔵)



⑦-2: "PLOT PLAN SHIOYA AREA" (米国立公文書館所蔵)

占領期の神戸地方の位置づけ

神戸市内でキャンプが設営された1945年末、占領軍全体としては大幅な軍備縮小と部隊再編が見られた。西日本占領部隊も第6軍が動員解除となり、第8軍が占領を開始し、第8軍第1軍団司令部は京都に置かれることとなった。兵庫県では1946年2月5日にそれまでの第33歩兵師団から第24歩兵師団へと占領部隊が変わり、6月からは近畿の他都市と同様に第25歩兵師団の管轄となった。

そもそも「神戸基地(Kobe Base)」とは何か。目まぐるしい部隊編成の変化が落ちつき始めた頃の占領軍報告書(米公文書)の調査から、本州南部と四国・九州の兵站(Logistics)を担う兵站基地であったことが読み取れた。兵站とは、戦争において作戦を行う部隊の移動と支援の計画・活動を意味し、たとえば物資の配給や整備、兵員の展開、衛生・施設の構築や維持など後方支援業務を、占領期の「神戸基地」は担っていた。

その背景には、1946年1~4月の米軍兵站基地の相次ぐ閉鎖が影響している。同年2月1日に呉基地、4月1日に名古屋基地、4月15日に九州基地が閉鎖され、それらの管轄していたエリアの兵站支援をも神戸基地が全面的に引き受けることになったのである。それに伴い、名古屋から2,500名、九州から280名と神戸基地への大規模な兵力の移動が見られ、西日本最大規模の兵站拠点として神戸基地は占領初期に存在感を増していったことがわかる。

なお、「Kobe Base」と名付けられてはいたが、その実態は六甲山系と大阪湾に囲まれたエリアで、行政区としては神戸市から以東の芦屋市、西宮市などのいわゆる阪神間を含む。こうした経緯と実態は、この地域が古くから生産・交通の要所とみなされ、補給の拠点として機能し続けた地域的特性を示す。1868(慶応3)年の開港前より良港とされ、各地をつなぐハブ港になった神戸港は、物資や食料・水の調達にすぐれていることを評価されていた。そこには空襲や戦争を受けても変わらない寄港地としての神戸の輝きが見てとれる。

“Kobe Base Area”にみる1949年の接收物件・土地

⑩ Kobe Baseのエリアと接收物件や土地を示した1949年11月の図面が、神戸市文書館に保存されている。このマップから読み取れる特徴を東から西へと概観してみよう。

マップの東の端は武庫川である。さらに、それを東へ越えた尼崎市の扶桑金属ビルや、神崎川を東へ越えた大阪市のJR御幣島駅付近のアイスクリーム工場も接收物件を示すために別枠で記載されており、東西に広いエリアがKobe Baseと位置づけられたことが見てとれる。西宮市の甲子園では甲子園ホテルや⑪甲子園球場、鳴尾浜、夙川沿い山手のエリアなど。

芦屋市の芦屋川を中心とした山手エリアの個人邸宅など。現在の神戸市東灘区の岡本や住吉・御影山手にも多くの接收物件が見られる。公共施設や球場、ホテル、学校等とともに、芦屋市の旧山口吉郎兵衛邸(滴水美術館)などの個人邸宅や現在は甲南女子大学となった地に建っていた旧広岡邸も接收対象となっていた様子が窺える。

神戸市灘区には、現在神戸大学の六甲台第2キャンパスになっている新築接收住宅の「六甲ハイツ」が置かれたり、戦争末期に廃校になった旧カナディアンスクール寄宿舎が中四国の占領にあたった⑫BCOF(英連邦軍)のレストホテル「グロスターハウス」として接收されたりした。

「六甲ハイツ」の場所は現在の神戸大学六甲台第2キャンパスの文理農学部(23万㎡)にあたる。既存の神戸経済大学(神戸大学の前身)の施設も接收対象に含まれ、1946年6~7月に交渉が行われたが、テニスコート、プール、講堂、運動場が接收された。1958年1月に返還された際、大阪調達局は同地区の住宅等128棟、延9,500坪の建物について、撤去を条件に競売入札に付した。また、返還地は、国有地900余坪(大学施設部分)、県有地3万1,000坪、民有地3万3,900坪(所有者27人)であったとされるが、駐留軍が自由に道路などを建設したため、元の境界線は全くわからなくなってしまっていたという。



⑪:空から見た甲子園球場と甲子園浜(衣川太一所蔵)



⑫:1947年6月 グロスターハウス
([「オリエンタルホテル三十年の歩み」1956年])

中央区には、三宮～元町を中心に旧居留地の焼け残った近代建築が接收され、⑬(次ページ)神港ビルに神戸基地司令部、三宮南に複数部隊の駐留したイースト・キャンプが置かれたほか、神戸港関連施設も立ち入り禁止とされ、百貨店や⑭山手のホテル(旧トアホテル、富士ホテル等)や個人住宅、公共施設など数々の接收物件が密集した。また、兵庫区東部の新開地には、⑮劇場・映画館の接收、黒人兵の駐留したキャンプ・カーバーの設営、神戸駅南にモータープールの設置などが見られた。

神戸港は終戦に伴い日本倉庫統制株式会社が解散したのち、神戸港の主要施設として、新港第1~第6突堤、中突堤、兵庫第1・第2突堤等、三井、住友、三菱、川西等の臨港倉庫の大半が接收された。神戸港の接收解除は1946年6月1日の税関再開に続く同年11月22日の兵庫突堤基部の接收解除に始まる。突堤に関しては、1947年2月に兵庫第1・第2突堤、1950年4月には新港第5・第6突堤、1952年3月にメリケン波止場、新港第4突堤が接收解除となった。その後も続いた接收が全面解除となるのは1959年2月のことだった。

長田区では、市民運動場(現在の西代蓮池公園)の接收や、尻池の重整備工場の設置のみで、建築の接收は見られない。須磨区では、山手に位置した武庫離宮跡が⑯射撃場「KOBÉ RIFLE RANGE」として整備され、南に続く離宮道あたりの住宅も接收された。

垂水区の青山台・塩屋町あたりで、1930年に英人貿易商アーネスト・ウィリアムス・ジェームスが住宅開発した「ジェームス山」に約60棟存在した外国人所有の洋館が将校家族向け住宅として接收された。このほか垂水区では、1894(明治27)年に舞子に建設された有栖川宮別邸を1917(大正6)年に住友家が譲り受けた迎賓館も、終戦直後に接收された。館内は洋式に改修され、1950年の解除後はホテルトウキョウの支店となり、オリエンタルホテル、神戸市と経営主体が移り、現在はシーサイドホテル舞子ビラ神戸として営業している。



⑭-1:旧トアホテルの全景(個人蔵)



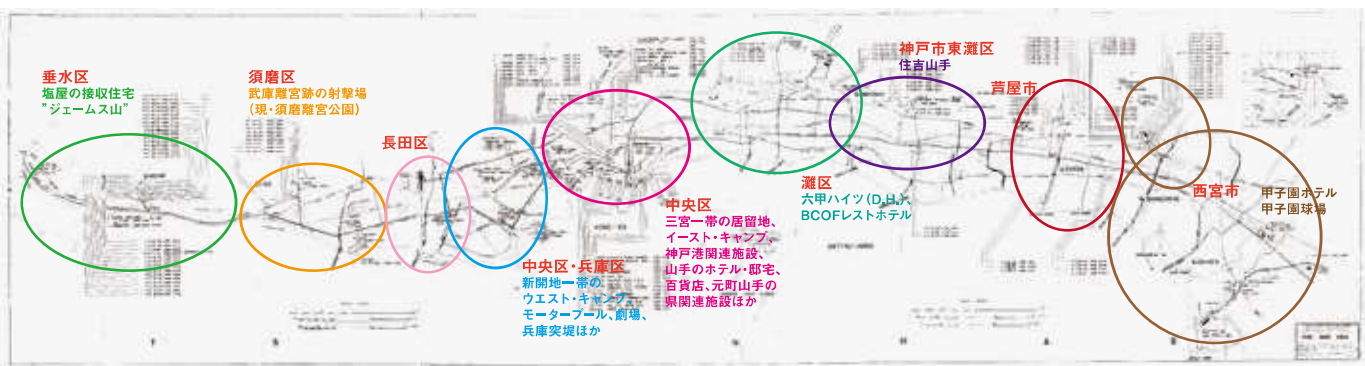
⑭-2:1946年2月 旧トアホテル(山手オリエンタルホテル)で送別記念に撮影する占領軍将校たち(神戸市文書館所蔵)



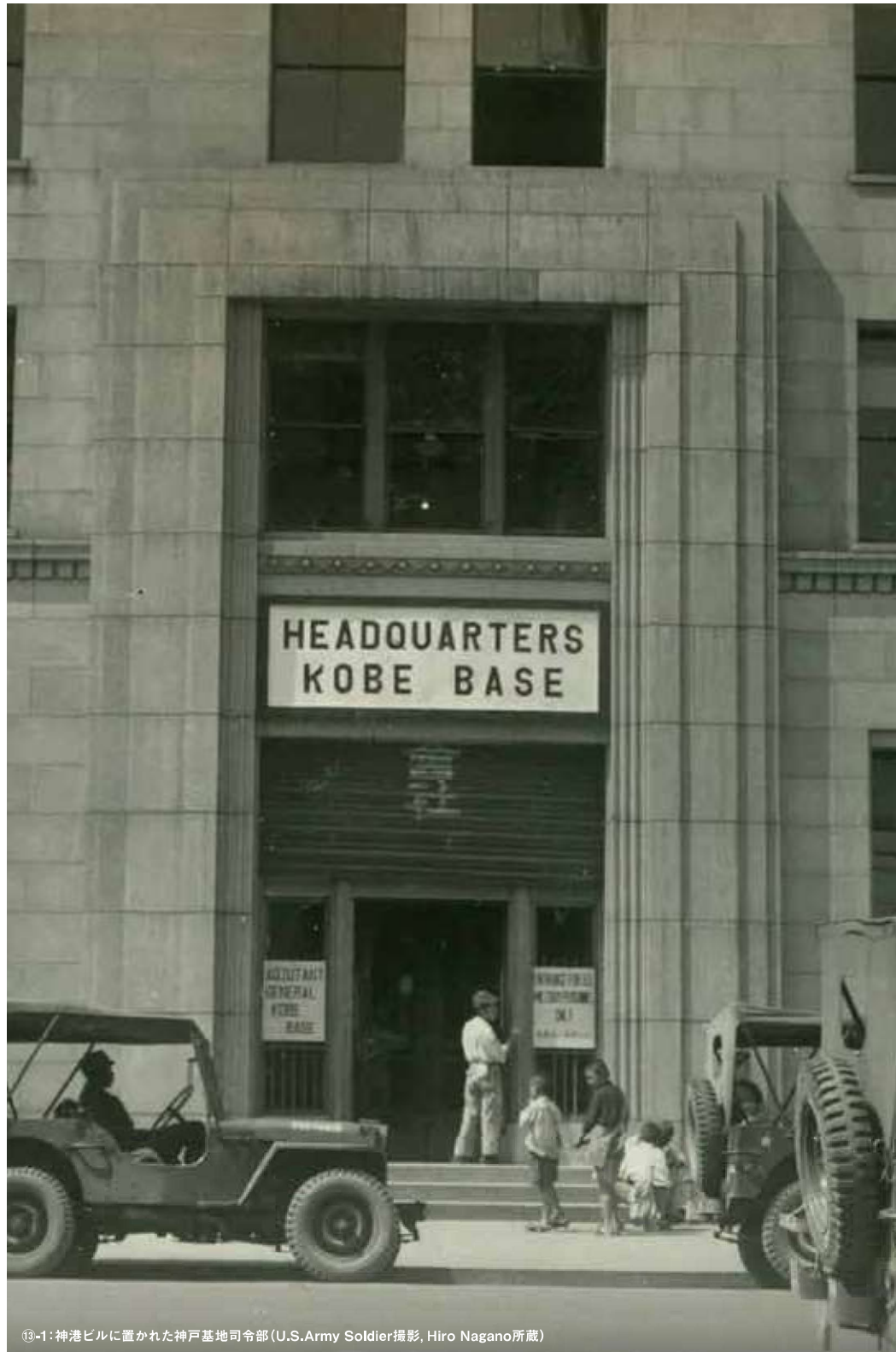
⑰:G.I. Theaterとして接收された聚楽館と復興する新開地本通り(U.S.Army Soldier撮影, Hiro Nagano所蔵)



⑯:1946年7月 元武庫離宮跡の射撃場“KOBÉ RIFLE RANGE”(米国国立公文書館所蔵)



⑩:神戸基地司令部作成の図面“Kobe Base Area”(1949年11月)に筆者加筆



⑬-1: 神港ビルに置かれた神戸基地司令部 (U.S. Army Soldier撮影, Hiro Nagano所蔵)



⑬-2: 2018年現在の神港ビルディング

Part 04

占領軍の住まい

— 占領軍家族住宅とキャンプ

占領下の都市と占領軍家族住宅(D.H.)

占領期の都市の具体相を明らかにしようとするのは難しい。その主な要因は、当時の膨大かつ過渡的な法制度に目配りをしなくてはならないこと、多様な史料を照らし合わせなければ都市空間の全体像が浮かび上がってこないことにあるだろう。

神戸の占領と接収を明らかにしようとするとき、ひとまとまりになった調達要求書や地方公文書等の記録は現状手に入らない。そのために、まずは全国的な「占領軍将兵家族住宅(Dependent Housing, D.H.)」の立地と数分的分布を把握して、占領下神戸の位置づけを行いたいと考え、国内史料でD.H.の建設・調達の経緯と1950年10月のD.H.の戸数を整理してみた。

占領軍から日本政府に対してD.H.の建設要求が出されたのは1946年3月のこと。それから1947～48年にかけて日本各地でD.H.の建設が進められたが、1946年末に完成したのは新築1,200戸、改修1,972戸でたったの3,172戸。翌47年3月末に完成していた戸数は約6,800戸だった。

「占領軍設営工事」として、2万戸を目指す家族住宅のほか、兵舎、飛行場、その他基地建設工事などが行われ、その大半は終戦処理費によって支払われた。占領初期の1946年から48年にかけての要求量が多く、以降は整備が進むにつれて減少していった。また、それ以降の占領軍の動向として第5空軍と福岡エリアの朝鮮戦争に向けた軍備増強の影響もあった一方、大阪エリアでは当初は接収されていた住宅が早期に解除となって196戸中103戸が返還となるなどの変化も見られた。

つまり、D.H.の戸数から占領下の都市を見ようとするとき、1950年10月のみを取り上げると、それまでの5年間の動きを見落とすことになってしまう。そこで、米国国立公文書館(National Archives and Records Administration, NARA)における米公文書の調査を行い、占領軍記録(SCAP Economic & Scientific Section Construction“114,040-Dependent Housing 1947~48”)から1948年6月の全国のD.H.と進駐兵力の分布と変化を捉えた⁵⁾。占領軍記録の多くは長い時間をかけて東京の国立国会図書館にマイクロフィッシュ(フィルム)による複製保存が進められているが、未だに国内では読むことのできない文書もあれば、当時の技術的な問題なのか読み取れない品質のマイクロフィッシュもある。また、原典と異なる整理秩序が付されている、NARAの検索システムと二重の調査が必要であったりもする。^⑦ちなみにNARAの閲覧室では、酸性化が進んでいるにもかかわらず、公開制限が解除された資料については原資料が出納され、鉛筆で書きこまれたメモも含めて一枚ずつ手に取って確認できる。



⑦: 米国国立公文書館に保存される占領軍記録(筆者撮影)

占領軍記録から捉えるD.H.の動向

占領軍記録の分析・検討から、全国的なD.H.の実態を把握したところ、次のような特徴が見られた。

空襲を経て、終戦後に残された建築・都市ストックを日本人が転用しようとするタイミングで占領軍は進駐を始めた。オフィスや将校・下士官の住居のために既存建築の接収が行われ、1946年3月に建設要求覚書が発せられて始まったD.H.の建設は、1948年をピークに1949～50年まで続いた。

占領軍は、進駐時点で現地で利用に足ると判断した建築ストックを短期間で接収、改築して使用した。1946年から翌年にかけての国内の資材不足は深刻だった。戦災で傷ついた環境下に戦災者や引揚者のための住宅確保、公共施設の復旧などが急がれ、燃料も不足、木材の利用が始まっていた製紙産業も打撃を受けて新聞のサイズも半分となるほどの状況が見られた。それに関わらず、資材が不足する場合には闇物資を用いてもよいとしてD.H.と兵舎の設営は急がれた。

最終的に全国で準備された約1万2,000～3,000戸の約70%が新築で、その建設は現地の判断に依るところが大きく、各地区で状況は異なった。1948年6月1日時点の各地区の世帯数を見ると、200世帯以上の占領軍家族がいたのは9地区。多い順に挙げると次の通りだった。

立地	指揮部隊 ⁶⁾	世帯数	調達住宅数	新築	改修
東京 東京都	GHQ/SCAP Hq	世帯数不明	3,350戸	2,357戸	993戸
横浜 神奈川県	8th Army Hq	1,301世帯	1,778戸	1,600戸	178戸
立川 東京都	5th A/F	333世帯	569戸	474戸	95戸
大阪 大阪府	I Corps 25th Div.	317世帯	405戸	209戸	196戸
神戸 兵庫県	Kobe Base	264世帯	350戸	225戸	125戸
ジョンソン 埼玉県	5th A/F	236世帯	247戸	247戸	0戸
横田 東京都	5th A/F	227世帯	449戸	449戸	0戸
名古屋 愛知県	5th A/F	224世帯	275戸	189戸	86戸
京都 京都府	I Corps Hq	207世帯	240戸	107戸	133戸

表: 1948年6月1日時点200世帯以上の占領軍家族がいた9地区(占領軍記録をもとに筆者作成)

これらのうち、たとえば戦災都市・神戸と非戦災都市・京都のD.H.を比べてみる。1948年6月から1950年10月まで、両都市のD.H.の分布にはほとんど変化がなかった。そこで、新築と改修の戸数に注目すると、1948年6月時点、戦災都市の神戸では新築225戸、改修125戸の計350戸、非戦災都市の京都では新築107戸、改修133戸の計240戸と、その比率には明らかな差があった。戦災都市では、既存の建築ストックが確保できなかったために、より多くの新築D.H.の建設がなされたことがわかる。また、同様に戦災を受けて占領軍の地方部隊が進駐した都市である大阪と名古屋と神戸を比べてみると、大阪の調達住宅数では新築と改修がさほど変わらないバランスで確保され、神戸と名古屋においては明らかに新築に偏っている点で共通する傾向があったように見受けられる。

なお、1945年11月にGHQが発出した「東京地区の洋風住宅の調査に関する覚書」によると、健全な構造、良好なガス・電気・水道・暖房設備、清潔さ、良好な内部仕上げ、最小限6室(うち寝室2室・浴室・居間・食堂・十分な付属設備のある台所等)、良好な家具・備品と多岐にわたる項目が接収する際の最小限度の資格基準として置かれた⁷⁾。これらを満たす建築は戦災を受けた神戸市内では十分に確保できず、1950年に神戸市東灘区となった住吉御影、芦屋市や西宮市の山手で多数の調達が行われた。

“キャンプ”に妨げられた復興

現在の神戸市の中心である三宮駅の南側に、巨大な接収地が置かれていたことは知らない人が多いだろう。しかし、⑱1948年2月の空中写真には、現フラワーロードを1本隔てて東西に、明らかに密度の異なる地区が見てとれる。⑲「イースト・キャンプ」が置かれたここには、「かまぼこ兵舎」が並び、高い柵が立てられ、ゲートが造られて銃を持ったMPが立ち、白人兵がジープで出動する場所だった。

このキャンプを設置するために、1945年12月23日という年末に1週間でバラック生活者132戸462名への立退きが命じられた。イースト・キャンプ北部の柵が立てられた場所には、戦中まで「小野中道商店街」というそごう百貨店南から生田川まで続く大きな商店街があった。東神戸と言われて賑わった商店街は、空襲のための建物疎開で取り壊され、終戦前後で戻ってきた人たちが、この時に占領軍によって移転を余儀なくされたのだった。

当時の住民の一人であった小林正信氏の手記⁸によると、戦前、小野中道商店街で営んだ店が1945年6月の空襲で焼け、そごう百貨店の20m南にはば場所を変えず、バラックを建てていたという。それも、6日間のうちに占領軍に命じられて立ち退きを迫られた。戦災者への占領軍の立退き命令の強制力と理不尽さを感じさせる。約31万㎡にも及ぶ広大な土地を確保しようとする、何の補償もなく移動させられた人がたくさんいたことだろう。一方でGHQは地主や接収された住宅の所有者には借借契約を結んでいて、所有か貸借かによる補償の差があまりにはっきりと分かれる時代だった。

このイースト・キャンプは白人兵の駐留地として、キャンプ・カーバーは黒人兵の駐留地として設営された。キャンプの内部は日本人の生活から「別世界」でもあり全国的にも不明点が多いが、接収された前後でその場所の性格がまったく変えられてしまった神戸のような例は多くはない。占領期にキャンプとして接収された地の大半は、引き続き米軍・陸上自衛隊の駐屯地となった⁹ほか、公園、大学等の学校用地になっている例も見受けられる。

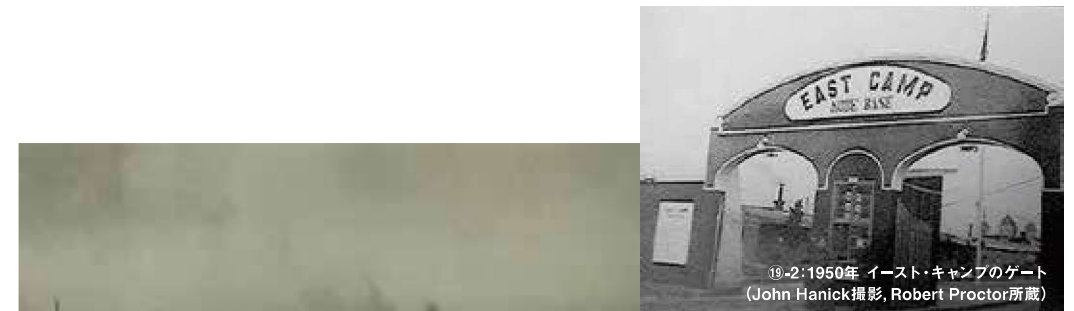
神戸のキャンプについては、日本人が暮らし集まった三宮・元町と新開地にほど近い。キャンプに暮らし進駐兵たちの活動場所と、居る場所が重なり合っているということは、「オフリミッツ(占領軍による立ち入り禁止指定)」となった接収建物への影響や、進駐軍労務に止まらない、きわめてプライベートな交流が生まれているはずだ。おそらくそれは、キャンプという場所や施設についての記憶ではなく、進駐兵という人についての記憶として残されている。その関わりが、占領下とそれ以降の神戸のまちに与えた影響は決して小さくないだろう。

米国国立公文書館における占領軍記録の調査と退役軍人による情報提供などから、1949年末時点のイースト・キャンプの内部には複数の歩兵中隊が部隊ごとに兵舎、食堂、便所、シャワー、補給所などを構えて宿営し、兵舎はいわゆるかまぼこ兵舎ではない切妻屋根のものも多数建てられ総数125戸に上ったことや、兵舎周辺には芝生が植えられていたこと、診療所やPX(酒保、購買)や娯楽ホールや自動車修理屋が共用施設として置かれたことなどが現状読み取れている。これらの様子も含めて占領下の神戸を明らかにすることは、筆者の今後の課題である。

イースト・キャンプとなったこの場所では、1946年1月1日に接収が始まり、接収解除は3次にわたり、早い場所で7年、遅い場所では1956年末まで11年近く接収が続いた。1952年に兵庫県、神戸市、神戸商工会議所、神戸貿易協会からなる「イーストキャンプ跡開発促進委員会」が結成され、1956年に「神戸国際会館」が竣工したが、周辺はオフィス街となり、従前あったはずの商業の集積や賑わいはいまま失われたままだ。



⑱:1948年2月20日米軍撮影空中写真(国土地理院所蔵)



⑲-2:1950年 イースト・キャンプのゲート (John Hanick撮影, Robert Proctor所蔵)



⑲-1:イースト・キャンプの兵舎 (U.S. Army Soldier撮影, Hiro Nagano所蔵)

Part 05

おわりに

不可視な履歴と記憶の継承

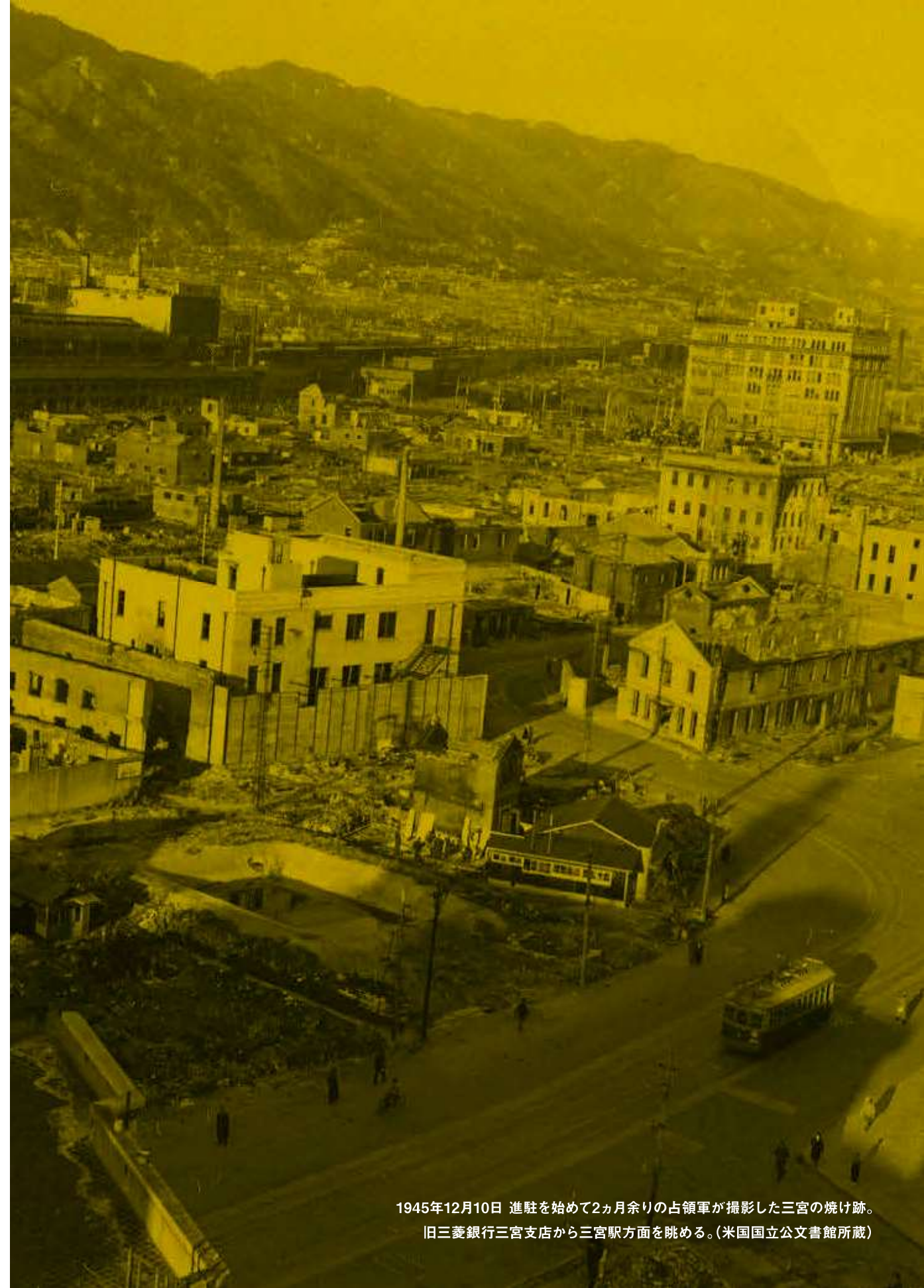
大きな出来事があったことを後世に伝えるためには、しばしば記念物が建てられる。終戦後、平和や復興を記念する施設・碑は日本各地で建てられた。一方で、現在の神戸市内では「接収」の痕跡がきわめて見つけにくい。

全国的には、GHQの駐留に関する記念する存在は残されているのだろうか。そう思って、試しに探してみた。GHQ進駐による主要都市の接収跡地には、返還後に大学等の施設・公園等に利用されることになったものも多く、中には「進駐軍上陸地の碑(鹿児島県鹿屋市金浜海岸)」や「米軍キャンプ跡地の碑(奈良女子大学付属中等教育学校校庭)」などの記念碑が建てられている例も見受けられる。

しかし、占領や接収・接収解除と同時代的に設置されたのではなく、いずれの例も2000年前後やそれ以降の動きであったようだ。これは、戦争の体験・記憶だけではなく、その後の敗戦国としての体験・記憶をも継承しようという認識へと拡がりつつあることを示すのかもしれない。

神戸には数多く、広い面積の接収跡地があるが、それらにまつわる体験・記憶は語り継がれてこなかった。多様な史料を読み解くための示唆を与えてくれるのは、いま、占領下のまちの記憶や知識を語ってくださる方々だ。みなさんが神戸にいることに感謝して、伝え続けるための礎を築きたい。

- 1 戦災家屋数は、従前戸数約21万戸に対して60~70%に上った。なお、1922~1943年に東京都制によって東京市が廃止されるまで「六大都市」として東京市・横浜市・名古屋市・京都市・大阪市・神戸市の6市が示されていた。1956年9月1日の地方自治法の改正で指定都市(政令指定都市)制度が創設されるまで、人口数が際立って大きかった。
- 2 西川祐子『古都の占領—生活史からみる京都 1945-1952』平凡社、2017年
- 3 1943年11月から戦後にかけて、日本軍によって戦時海運行政の統合が要望され、税関は各地の海運局に統合されていた。
- 4 村上他「占領期の神戸における接収ホテルの状況—占領下日本の都市・住宅に関する研究その9」『日本建築学会大会学術講演梗概集』2016年8月
- 5 村上しほり、大場修、砂本文彦、玉田浩之、角哲、長田城治「占領下日本における部隊配備と占領軍家族住宅の様相」『日本建築学会計画系論文集』82巻、739号 pp.2441-2450, 2017年9月
- 6 指揮部隊はいずれもGHQ/SCAPのもとにおかれた。8th Army(第8軍)の下位部隊にあたるのが、横浜、大阪、神戸、京都、米陸軍太平洋航空軍団(Pacific Air Command, United States Army)——現太平洋空軍(Pacific Air Forces, PACAF)の下位部隊にあたるのが立川、ジョンソン、横田、名古屋だった。
- 7 占領軍調達史編さん委員会編著『占領軍調達史—占領軍調達の基調』調達庁、1956年
- 8 小林正信『あれこれと三宮』三宮ブックス、1986年
- 9 米軍の駐屯地となった例は「接収解除」とまとめられない。1952年4月平和条約発効による日本の主権回復後も旧日米安保条約に基づき在日米軍の基地使用が認められ、駐留は続いた。



1945年12月10日 進駐を始めて2ヵ月余りの占領軍が撮影した三宮の焼け跡。
旧三菱銀行三宮支店から三宮駅方面を眺める。(米国立公文書館所蔵)

2.公開ヒアリング

"KOBE"を語る

—私たちの見たGHQと神戸のまち



Shimomura



Toyoda



Murai



Miyazaki



Nakano



Tsuna (Tetsuo)



Tsuna (Chiyoko)



Yamamoto

私たちが語ります。

第2回は、GHQ占領下で戦後復興に向かう神戸のまちでの記憶や体験談を、3つのトピックに分けて協力者からお聞きしました。8名の協力者と講師・モデレーターが輪になって語りあう公開ヒアリングを通じ、戦後、GHQのいた頃の神戸のまちでの日々の出来事を描き出します。



Serizawa

こんにちは。センター長の芹沢です。KIITOはデザインの拠点として作られたセンターですが、事業企画を検討しているうちに、「神戸ってどういうところかを知らない、何もできないだろう」という話になりました。一般的には「神戸」=すごくおしゃれなまちで、異人館とか居留地とか、観光面では全国的によく知られています。しかし、それだけではない神戸の顔を知るため、いろいろな角度から私たちの神戸に対する知見を増やしていきたいと考え、「神戸スタディーズ」という企画を始めました。

僕も、占領下はまだ生まれていませんが、父母たちから話は聞いており、かすかな痕跡は知っていましたが、いざ本当に「占領」がどういうことだったのかは、僕らの世代でもあやしい、ことです。そして、ますます時代は変わり、また、村上さんよりもっと若い世代も生まれてきています。やっぱり日本という国にとって「占領下」というのは、本当に大変な時期だったし、我々の社会を大きく変えていったと思います。そんなことを改めて考え、このKIITOでも、GHQ占領下の神戸について、腰を据えて調べていきたいと思っています。なお、この建物は、昔の生糸検査所です。アメリカ軍に接収されて、税関とここが占領開始時の拠点になっていたことが第1回目のレクチャーでも解説されました。そういう経緯のある場所で、みなさんから「GHQと神戸のまち」というテーマでお話をうかがうのなにか因縁のような気がします。



Murakami

こんにちは。講師の村上です。3つのトークテーマに基づき、8名の協力者にお話しいただきます。まずは簡単に、GHQ占領期とは何か。

GHQとは、連合国占領軍 (General Headquarters) という意味です。GHQによる占領期とは、第二次世界大戦後、ポツダム宣言調印の1945年9月2日からサンフランシスコ平和条約発効の1952年4月28日までの7年弱です。もちろんそれ以降も「進駐軍」としてではなく米軍が駐留する時期は続きますが、今日はこの7年を中心に、キャンプが残っていた時期なども含めてお話を進めることにします。

戦後直後から日本においては間接統治というかたちで占領軍がいて、全国の都市部に駐留し、土地や物件・建物を接収しました。税関やこの生糸検査所も接収されましたし、神戸市内にもいろいろなところで使われていた場所・建物がありました。また、米軍に使われていた場所には、日本人は利用者としては入れませんでした。そういうものを外から見てきたという体験も含めて、これまで記録化されてこなかった「GHQと神戸のまち」の体験や記憶について話し、聞くことが、今回の主題です。

Theme 01

空襲から終戦

一住まいや学校の思い出

村上 第1部は「空襲から終戦一住まいや学校の思い出」をテーマに、この時期の住まいや学校の思い出を話していただきます。

1945年9月26日の神戸進駐初日の写真①にKIITOが見えます。GHQは神戸にやってきてまず税関に司令部を置きました。そのときに星条旗を立てて撮られた写真です。

まず、自己紹介として、**1945年8月15日に何歳でどこにいましたか?**という質問に、一人ずつお答えください。



①:1945年9月26日 神戸進駐初日の税関と旧生糸検査所(米軍兵士撮影、衣川太一所蔵)

公開ヒアリングの進め方

3部のトークテーマを設定しました。

1部は「空襲から終戦一住まいや学校の思い出」です。ゲストのみなさん共通の体験・記憶として、戦争体験があります。空襲の罹災、学童・縁故疎開、学徒動員、戦中戦後の移動といったいろいろな経験をされています。2部は「生産／消費」です。食糧難の時期の闇市や、何を食べ、どのように調達したか。そんな時にも映画館やダンスホールなどの娯楽はあり、占領期の働き方は進駐軍の影響もありつつ移り変わっていく。3部は「進駐軍」です。当時の神戸のまちには接収された土地や建物、キャンプがありました。私の見た進駐軍はどんなだったか、どんなことを見聞きしたか、お話ししていただければと思います。

各テーマについて、ゲストのみなさんに30分でお話しいただきます。会場からの発言の時間を5分とります。よろしくお願ひします。

豊田 1945年8月には16歳でした。現在は三ノ宮駅近くにおりますが、3月17日と8月6日の2度の空襲に遭いまして、住まいがなかったものですから、五社の田舎の奥のほうで、終戦を迎えました。その翌年には三宮のほうに出てきました。

下村 数え年の10歳です。元町通から兵庫県多可郡の野間谷村、今の八千代区に縁故疎開をしておりました。

山本 現在は下山手通7丁目に住んでおります。終戦時は三宮の小野中道商店街から縁故疎開して千葉市にいました。院内国民学校で6年生のときに終戦を迎えて、卒業した国民学校は、鉄道連隊の兵舎でした。

宮崎 この年は5歳で、ちょっと戦争のことを話す資格があるんかないんか分からないんですけども、子どもがしゃべってると思ってください。3月には、ちょうどKIITOから1キロくらい北の八幡通という今でも神社があるところの数m山側に住んでおりました。だから、ちょうど占領期に「イースト・キャンプ」になるかの境目くらいのところで空襲に遭いました。空襲が来たら家の地下に掘った小さな穴に逃げるんやと教えられてました。ところが現実起こってみると危ないから逃げなさいとなって、数10m北に隣保なのか共同のプールくらいの大きさの半地下のものがあって、そこに入っていました。でもそこも危ないってことで、今の市役所の東遊園地の土手のトンネルみたいなのところに何時間かしばらく入って、表に出たらもうその一帯すべて焼野原で。運よく生き残ったんだと思ったんです。それから少し後に、淡路の塩尾の母親の実家で2年間ほど幼稚園と小学校に行き、小学校2年生で須磨に帰ってきました。

中野 終戦の時は15歳です。1945年6月5日は阪神御影のすぐ上のところにあった学校が工場になっていたんですね。川西航空機の下請けをやっていた、焼け出されて、学校ごと加古川の奥の厄神さん(宗佐厄神八幡神社)の近くに先生の大きな家があった。学年全体がそこに疎開したわけなんです。玉音放送は夏休みで帰省中だったので、田舎の寺で聞きました。

網(千) 私は国民学校の6年生のときに終戦になりました。私は家族で一番末っ子だったので、残留組で疎開はせず家にいました。1946年に国民学校を卒業して女学校に入り、2年生のときに新制になりまして、中学3年、高校3年、というふうになりました。住んでいたのは大阪市の東のほうだったので、そんなに空襲は来なかったんですけど、艦載機がときどき飛んできて、もう少しでやられるところだったらいいんですけど、幸いにして助かって、今の暮らしがあります。

網(哲) 1927年生まれなので、18歳でした。学徒動員で尼崎の工場に行っていました。お昼になって、天皇陛下が放送があるから、みなさん広場に集まるよというのでね、広場に集まりました。録音は全然聞こえませんでした。どうもおかしいなって事務所へ行ってNHKのラジオを聞いたんです。そしたらどうやら戦争は終わったらしいと。あの頃は負けたとはあまり言わなかった。僕らはそのとき18歳でしたんで、家に帰っても、疎開はしたらあかんのですよ。夜も火叩きと、竹やり持たされてね、B29来るの待ってたんですよ。で、今から思うとそんな、B29迎え撃つのに竹やりと火叩きか、って思いますけど、あの頃の人間はなんか持っとらんと心配なんです。だから持ってたんです。で、もし米兵が落下傘で上から降りてきたらそれで下から突こうというふうな感じやったんですけどね。今考えると、津波の時は、「てんでんこ」で逃げようとするよ、戦争中は在郷軍人の方が「逃げるな！」言うんですよ。「空襲は怖くない」と言うような時代でした。生まれたんは今の中央区(以前は生田区、湊東区)の多聞通2丁目で、湊川神社のちょっと東



中野正三さん(87歳/終戦時16歳)
神戸市垂水区在住。終戦時は通っていた兵庫師範学校が加古川に疎開していた。終戦後、学生の頃には神戸港第4突堤で進駐軍物資の運搬アルバイトをした。神戸市内で学校教師として就職した。



②:「神戸市戦災焼失区域図」
日本地図株式会社 1946年

の方やっでん。で、楠公さんの第1回目のお稚児さんになりました(会場歓声)。そのときの写真もありますけどね。それからずーっと神戸で育って、今も神戸におります。

村上 ありがとうございます。網様はご夫妻で来られています。

村井 1945年8月は7歳で国民学校2年生でした。多可郡松井庄村(多可町加美区)の母親の里に疎開していました。空襲のときは兵庫区の松本通で、湊川公園のすぐ西のあたりで空襲を受けて、3、4日後に松井庄へ行ったんです。神戸に帰ってきたのは1948年で、丸3年疎開しておりました。

村上 ありがとうございます。今でいうと小中学生は母方や親戚を頼って兵庫県内の山間部や淡路島や他県に疎開されていて、16歳の中野さんは学校ごと疎開、18歳だった網哲男さんは疎開してはならなかったという、年齢による違いが見えました。

戦災によって神戸の市街地が非常に大きく燃えてしまっているのがやはり前提にあるんですね。終戦当時どうだったかを今聞きましたけれども、終戦よりも前の3月と6月に、みなさん罹災をされていました。灘区、葺合区、生田区、と言われていたことを戦災焼失区域図②を見ると、今や神戸の中心部の三宮は、1980年に葺合区と生田区が合併して中央区になる前の区界にあたります。その三宮の周辺を見ると、さっき宮崎さんと山本さんのお話で空襲まで家があったという三宮南東エリアが焼け払われている状態が分かります。これだけ大きく空襲を受けた神戸では、焼け残った建物がきわめて数少ないことは史料からも読み取れますが、お話を聞くと、空襲による影響をみなさんが大きく受けていることが分かります。

1945年9月の居留地で、大丸の東隣の三菱ビルの隣の朝日ビルの上から三宮方面を見て撮った写真③を見ると、堅牢なRC建造物の屋根も落ちてしまっている空襲被害が見えます。3か月後の12月に撮られた写真④を見ても、三宮に住み続けられるような状態だったとは思えません。それで、空襲を受けて、戦後にかけても移動された、というお話が既に出ましたが、疎開をして終戦後帰ってくるほかに、多くの人が細かな移動をしなければいけない状況でした。家が焼けてしまっていて、家族と一時的に離れたり、どこか別の場所に家を建てたりとか。復興・再建をするなかで、仮住まいとしてどこか行って、縁故疎開の話も先ほど出しましたが、やはり誰かを頼って、ちょっと場所を移って、落ち着けば戻ってくるということがあったかと思えます。次に、戦後5～10年にどんな移動をしましたか?とお聞きします。10年経つと占領期は終わっていますが、その頃までにどこにいてどんな移動をしたか/していないかを、ここからは年齢順でお聞かせください。

網(哲) 私は動かなかったんです。空襲のときも、今から防空壕に行っても遅いと兵隊さんに言われましたけれども防空壕におりました。でも、いざ言うときは通行人がみんなその防空壕に入ってもてね、家の者が入れられなかった。空襲のときにも神戸に住み続けたおかげか、戦後も変わらず、市電通りの多聞通2丁目において、新開地本通りの近くの「ウエスト・キャンプ」やたくさんの黒人兵を見ました。

豊田 3月17日の空襲で焼けて、六甲の祖父の家に行きまして、その家がまた8月6日の空襲で焼けました。もう行くところがなくなって、父が当時働いていた軍需工場の社長さんが社員の荷物を疎開させるために借りた五社の奥のほう、田舎の物置のところで私は終戦を迎えました。



④:1945年12月10日 旧三菱銀行三宮支店
(現・三菱UFJ神戸支店)から三宮駅方面を望む
(米国立公文書館所蔵)

そして終戦になって、早く神戸に帰りたいと思って、探したんですけども神戸はもう焼野原でなかなか家が見つからなかった。そんなときに父がたまたま五社で、同級生の松原さんにお会いして。松原さんが小寺謙吉さんの甥で「叔父さんが、そごう前の土地を持っていて、土地を貸してあげるから一緒に家を建てないか」と言われて、もう飛びつくようにして、そごうの前の本当にもう、イースト・キャンプのすぐそばに店を作ることができました。1946年の4月からそこで店をオープンしまして、お客さんのほとんどは進駐兵でした。

中野 1949年に卒業して就職いたしました。勉強していないのに学校の教師になったので本当に苦労しましてね。翌年6年生担任当時の教材では、内村鑑三氏の『デンマーク国の話』が国語の教材で、それを一生懸命教えました。摩耶小学校に勤めておったんですが、みんな楽しみもないからしゅっちゅう六甲摩耶山に行きましたね。その頃は戦争中で撤去したまま摩耶ケーブルのケーブルカーがないから徒歩で登山。女の子が上で2人、「しんどい」言い出して、2人を両方に背負って、ケーブルカー線路の横の階段を下りたことがあります。若いとは言え、翌日、腰が痛かった。

村上 中野さんは終戦当時は15、6歳ですね。今の学校の先生より若かったのですか。

中野 戦争中で学校が短縮されましたね。勤めたときに20歳か、教え子が高校に進学した折の同窓会では、修法ヶ原の池でボートに乗っていたら、岸に居た若い衆が突然「だれが生徒か先生か」と「めだかの学校」を唄いはじめました。

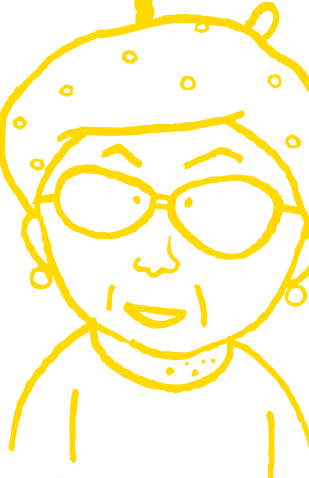
村上 学校が加古川に疎開したというのは。

中野 はい。6月に空襲に遭いましてね。それで英語の大西先生が大地主で、そこを頼りに学年が疎開したんですね。それで7月から年末まで行きましてね。農業しながら、勉強はまともにしなかったですけれども。それでは困るということで三学期になったらすぐ、赤塚山(現・東灘区)の阪急御影の上で集中的に勉強させられましたね。中学校のときに教えておかないといけないことからやらされました。例えば、数学では最低条件として「対数」を教えられました。

村上 御影の兵庫師範学校でのご記憶ですね。

山本 私は縁故疎開しましたので、生まれ育った小野中道商店街の実情はちょっと分かりません。そこで、妹の容子が書いた「神戸大空襲」という文を読ませていただきます。

「71年前、6歳だった私は、出生時の障害で手足が不自由なため、何時も母に背負われていました。あの3月17日、神戸大空襲の日もそうでした。そごう百貨店のすぐ近くだった我が家から、国鉄三ノ宮駅広場に近所の人たちと避難しました。その時、我が家を含む中道商店街の店は次々と壊されていました。これが中道商店街の最後の姿でした。子ども連れは入れてもらえず、母は私を避難場所へ置きに戻り、再び戻りました。私はずっと泣きながら待っていました。母が私の元へ戻り、しばらくして辺りが暗くなり始めた頃、焼夷弾が降り始めました。「みんな、そごう前の地下道へ逃げよう!!」と言われ、一斉にそこへ向かったのですが、もう大混乱でした。特に私を背負った母はみんなの後をやっと追いつき、地下道へどうにか入ることができました。と同時に、焼夷弾が落ち、物凄い勢いで燃え上がりました。私の身体に火がつかなかったのが不思議です。地下道に入れてほっとしたのも束の間、「こども危ない!!」と言われ、また難儀な脱出です。抜け出すのも最後で、必死に逃げる人混みにやっと追いついたものの、押しつぶされてしまいそうでした。今度は布引の山へ向かって逃げました。火の手は激しさを増し、三宮一帯は真っ赤でした。その光景を私は母の背で茫然と



山本尚代さん(83歳/終戦時11歳)
神戸市中央区在住。小野中道商店街に生まれ育った。終戦時は千葉市に疎開していて、終戦後は家とお店があった場所にカマボコ兵舎が建ち並び、戻って来られなかった。

神戸に帰ってきて、須磨駅で警察官にえらい調べられました。



村井勝さん(79歳/終戦時7歳) 神戸市灘区在住。終戦時は母親の郷里の多可郡に疎開していた。終戦から3年後に中之島に帰り、また移動して住んだ三宮町3丁目では、酔った進駐兵のいざこざを多く見た。

見つめていました。その後、私たちは灘区水道筋にある親戚の家へ行きました。

そこで、焼け出された親戚3所帯が暮らすことになりました。市電筋をはさみ南に稗田小学校がありました。そこへは、次々とたくさんの遺体が運びこまれていました。6月5日、警報が鳴り、いつものように庭に掘った防空壕に入りました。その日は、父と兄が何を思ったのか、防空壕の上に畳を数枚載せていました。その時の爆撃はさらにすさまじく、恐ろしさにみんな震えながら抱き合っていました。爆撃がおさまり、防空壕から出て驚きました。畳の上には、びっしりとガラスの破片が突き刺さり、大きな家は跡形もありませんでした。この空襲で祖父は負傷し、治療もなされず、衰弱死しました。その後、母と私は小学生の姉二人が縁故疎開している母の実家、千葉へと向かいました。7月7日、千葉市大空襲が待ち受けているとも知らず……。」

そして7月7日に私たちは千葉市大空襲で焼け出され、今度は居場所を求めて、母のいとこの借家へ押しかけていきました。まだそこには人が住んでいるのに。あの頃は本当に暴挙が暴挙とも思われぬ、なんとも情けない状況でした。そこで過ごして、その地の女学校に入りました。その女学校は気球連隊の跡地でした。先生も何人かは軍服姿でした。そしてそれから神戸にやっと戻ってきました。そのときには、我が家のあった小野中道商店街は、駐留軍のキャンプになっていましたので、もうどうしようもなく。次は、灘区水道筋にあるおじが建てていた家に、戻ることができました。そんな状況で、もう本当に、転々となりました。カマボコ兵舎がうらめしいです。

村上 山本さんの妹の清村容子さんが書かれた文章は「神戸 災害と戦災 資料館」のホームページに掲載されています。そごうの南にあった小野中道商店街は、空襲被害のみならず、戦後も1945年末にGHQの宿営地のイースト・キャンプが置かれることになり、接収地に飲み込まれてしまいました。

下村 私は焼け跡をちょっとでも見せておかないといけないと父が思いましたようで、1945年の秋口に一度焼け跡を見に帰ってきました。焼け跡には金庫の跡があって、落ちていた1銭玉や5銭玉などの小銭を拾い集めました。そのときの小銭は大切に保管しておりまして、今では宝物になっています。元町通に戻ったのは翌年の暮れで、それまでは、祖母たちがいた家に、焼け出された親戚一同、十数人で住んでいました。終戦のときは3年生ですから、本当にそのぐらの記憶しかないと思いますけれど、戦後はすぐ商売ができたわけではなく、その辺は本当にもう、何人かの方も言われましたけれど、子どもの印象でしかない……。それを研究者としての眼で、こういうふうにしていただけるのはとっても嬉しいと思います。

村上 そうなんです。今、下村さんがおっしゃったことを補足すると、今日お話しいただいている方々は、網哲男さんが90歳で、宮崎さんが最年少の77歳と年齢の幅が13年もあるんです。よく、終戦当時の話や空襲の体験の聞き取りをするときには、どうしても、当時大人で記憶がある人という限定をして、探される場合が多いと思うんですね。今回も事前にみなさんに聞き取りさせてもらっていたときにも、子どもの記憶でしかないの、と何人もの方に言われました。私はその当時のご自分の経験やどう見えていたかの記憶で、全然いいと思うのです。もちろんその後、記憶もまた変わっているかもしれませんが、人の認識や記憶ってそんなものです。今、70数年経って、どういうふう、当時の自分の体験を覚えているかを聞かせてもらうのは、とても大切なことだと思います。そういう意図のもとにお話しいただいていることを、会場のみなさんにも

受けとめていただければと思っています。

村井 さっき疎開の話をしたんですが、縁故疎開で母方へ行って1年。それから、父方の縁者の播州赤穂で2年、合わせて3年神戸を離れていました。やっと神戸に戻ったんですけど、「都会地転入抑制緊急措置令」という政令が出ていて、空襲を激しく受けた比較的大きい都市には衣食住が足りないからすぐに帰ってはいけない、できるだけ疎開地に残っておれということが、決まっておりました。それが解除になって、私は1948年5月に帰ってこられたのだらうと思うんです。そのときに、国鉄の須磨駅で降りて、兵庫区の住まいにするところへ帰ってきたんですが、須磨駅で警察官にえらい調べられました。父親が怒って警察官に食ってかかったんですけども、聞くと、その前に長田区で朝鮮人の方の学校を閉鎖するという問題で大騒動があった後だったんですね、そのときに、大きな荷物持って帰ってきたもんだから、疑われたのかもかもしれません。

村上 須磨に帰ってきてから、どちらに住まれたんですか？

村井 須磨駅で下車して、それから市電、あそこ終点ですから。市電で座って帰れますからね。それで降りたんです。それから、中央市場のところが兵庫区の中之島に住みました。仮住まいですけどね。

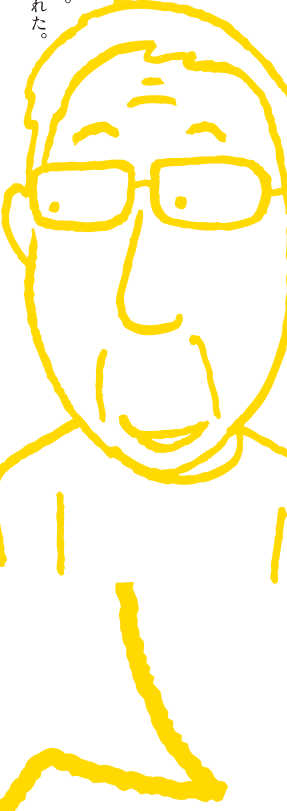
村上 そこからまだやっぱり移動を？

村井 それから、大丸の前の三宮町3丁目に、父の会社の勤め先の建物に部屋を作ってもらって転居しました。

宮崎 私は三宮で空襲にあったんですけども、残念ながら何月何日にどう動いたかの記憶はないんです。ですから、8月15日に何をしていたかも全く自分では分からないし、戦争がどこであったのかも分からないし、いつ終わったのかも分からなかったんです。確かなことは、空襲からしばらくして淡路の洲本のちょっと手前の塩田村という小さな村へ疎開したと。おそらく、幼稚園にちょっと行って、塩田村小学校にも入ったという記憶があります。当時そこにはミカン山というのがあって、大人たちは毎晩そのミカン泥棒が発生するんで、かがり火焚いて山の番をしていました。食べ物は多少あったと思うんですけども、やっぱりお腹がすいて、道端のところに畑耕して、芋の茎をもらってきて、それを植えて、細い芋を作って食べました。

神戸に帰ってきたのは小学校2年生のときです。西須磨小学校での記憶はですね、まず、授業が午前午後の2部制でした。校舎が狭くて。私の親父はもともと、三宮の現在の神戸国際会館の南側のところでインド人の方相手に果物屋をやっていたので、そういう小さな店を須磨で開きました。須磨には古くからの家があったんですけども、焼けてるところもたくさんありましたね。もうひとつ印象に残っているのは、道路にね、まあ350mlのボトルくらいの八角形の焼夷弾の跡が残ってましたね。あの頃は焼夷弾ということが分からなかったですけども、よう見たら、これ焼夷弾の跡や。友達が、そういう畑に落ちてるやつを触って、爆発して、手が飛んだということもありましたね。決して、穏やかな時代ではなかったな、という思いです。その後、23歳くらいまでそこで過ごしました。

宮崎芳治さん(77歳/終戦時5歳) 神戸市須磨区在住。終戦時は淡路島に疎開していた。家のあった場所はイースト・キャンプとして接収された。占領期の記憶を人に話すのは初めてのこと。



Theme 02

生産／消費

村上 第2部では、闇市、食糧、娯楽、占領期の生業・仕事について話していただきます。イメージのために写真を紹介します。

例えば「闇市」は、大丸の東隣の三菱のビルからトアロードを眺める写真を占領軍が撮っていて、その写真①の裏には、元町駅前の闇市に向かっていく日本人がたくさん見える、などと書かれていたんですね。三宮、元町の闇市が占領軍にも注目されていることが分かる写真です。もう1枚の写真②は米軍兵士が撮影した民間所蔵のものですが、元町駅の南側、今のJRAのビルから撮った闇市です。高架下だけではなく、南側の路上いっぱいにも闇市が広がっている、これは1946年9月までは「普通」の状態でした。当時元町駅は南側に階段で降りられるようになっていました。神戸市文書館所蔵の写真③では、その場にぐっと近づいて見ることができます。トタン屋根があって、見た感じは闇市か普通の市場が分かりませんが、見回りの神戸市警察がいるようです。

そして、食糧の調達や食べたものについてはあまりいい写真がないですね。食糧の調達と言えば「買い出し」だと思いますが、その風景を撮影した写真は残っていません。つまり、食料に困ったとか何を食べたというのは、お話を聞かせてもらうしかないわけですね。食料に困るほどの状況でカメラを向けている場合じゃない、という想像もできます。これは1950年頃の湊川市場の写真④ですが、既に市場として復興してからの写真ですね。

「娯楽」は例えば、1946年の写真⑤を見ると、三宮劇場で『人生劇場』という映画が上映されていたようです。この原作は尾崎士郎の自伝的な新聞連載小説だと思いますが、1936年から14回にわたり映画化されていて、この頃上映されていたのはおそらく1938年公開の『人生劇場 残侠篇』か、などと思います。映画は当時本当に盛んで、若い人や幅広い年齢層が並んでいるのも見えます。

「占領期の労働」の象徴的なものと言えば、靴磨きの少年たちですね。神戸駅構内の靴磨きの少年たちと占領軍の兵士の写真⑥が残っています。一方で、同時期の1946年末に、神戸大空襲で焼け跡になった元町商店街が再興して「ジュラルミン街」ができていた風景⑦も見られ、驚くほど早期にこうして商店街として復興した例もありました。こういったトピックに思い出すことを、みなさんに話していただきたいと思います。



①:1945年12月10日 旧三菱銀行三宮支店(現・三菱UFJ神戸支店)からトアロードと元町駅方面を望む(米国国立公文書館所蔵)



②:元町駅南側の現・JRAビルから見た闇市(米軍兵士撮影、衣川太一所蔵)

⑤:1946年 三宮劇場で『人生劇場』の上映(神戸市文書館所蔵)



③:1946年 元町駅南側の闇市を見回る警察官(神戸市文書館所蔵)

④:1950年頃の湊川市場(神戸市文書館所蔵)



⑦:1946年末に完成した元町商店街の「ジュラルミン街」(神戸市文書館所蔵)



⑥:1946年 神戸駅構内の靴磨きの少年と占領軍兵士(神戸市文書館所蔵)

戦争が終わってからは、闇市のおかげで
たしかにものが豊富だね。



網哲男さん(90歳/終戦時18歳)、千代子さん(83歳/終戦時11歳)
神戸市中央区在住。終戦時は中央区(湊東区)多聞通2丁目在住。
終戦は学徒動員で行っていた尼崎の工場へ迎えた。ウエスト・キャンパの黒人兵と闇市の記憶が強い。
千代子さんは終戦時には大阪在住で、疎開をせず終戦も大阪で迎えた。

網(哲) 闇市ができたときにね、僕らびっくりしたんです。何でも、今まで見たことないようなものが売ってました。家族の者がね、闇市に行ったら、カレーライス食べられるとか、ぜんざい売ってるとか言うんです。そのころ飢えてましたからね。どれどれ、いうて、その店まで行ったら、カレーライスはたしか10円。ぜんざいは本当の餅が入ってて30円。当時にしたらものすごい高いですよ。ただね、やってる店のほとんどが韓国人とか中国の人なんです。旗立ててやってるから、日本の警察がこれは闇物資やということが分かって取り締まれないんです。日本人でやってたのは、やくざとかね。そういう人たちが「場銭」をとってきちっと店を統制してたので、治安は良かったんです。だから僕ら18歳くらいやったんですけど、歩いて何にも怖いことなく、お金さえ出せばなんでも手に入りましたね。うちのおふくろは何を思ったんか、僕にね、マンドリン買ってきてくれました。闇市で(笑)。またマンドリンを教えてくれる中学高校の音楽の先生が近所におってね。習いに行きましたわ。下駄はいてね。それが1946年くらいですからね。

神戸の闇市は大阪に比べて恵まれておったんですよ。後背地に田舎が多かったしね。淡路島があってその向かいの明石の漁業が盛んでしたからね。明石からおじいさんが息子のとった魚を一匹小遣いに分けてもろたのを持って、多聞通のうちの店に売りにくるんです。魚は一匹か二匹しか持ってませんが、それをわりあい高く買わけて。うちはその魚をいただきますし、そのおじいちゃんは闇市行って一杯飲んでね。上機嫌でまた明石に帰っていく。定期的にそういうのがありましたね。だから戦争が終わってからは、闇市のおかげでたしかにものが豊富だね。楽しい時代を送りました。

村上 闇市の場所は三宮から神戸駅の間ですか？

網(哲) そうそう。神戸駅からずっと元町駅まで闇市のある高架下を歩いておったんですよ。もうひとつね、戦争中に元町の通りを歩いてまして、「風月堂」の前を通ったら(会場笑)、20人くらい並んでるんです。あの頃はなに並んでるか分からなくても、人が並んでたら並んだんです。なんか売ってくれるわけやからね。ずーっと前行って、すると紙箱に入ったお饅頭でね。こんな甘いものが、世の中にあっただんかないくらいで。70何年経った今も覚えてるね。

村上 美味しいお饅頭だったんですね。今日は1997年創業「風月堂」の会長の下村俊子さんにお越しいただいています。下村さん、話されますか？

下村 私はあんまり覚えてないんです(笑)。言い訳やないですけど、戦争中の商売については記憶が全然ないんです。1938年あたりに戦時統制経済が始まって、解除されたのが1952年なんですよ。戦争終わって7年も経つまで菓子屋は満足に商売できる状態ではなかったので、父は配給のパン屋さんをしました。父は菓子屋なのでパン屋の資格はないですから、パン屋さんに入って修業して、扱わせていただく許可を得て、私が5、6年生の間の1947、48年くらいに配給のパン屋さんを営業していました。1947年に200を超える法律ができてまして、「食品衛生法」もできてるんです。衛生状態は悪い時代でした。そして、同級生くらいの子どもたちが、よく、パンをくださいと言って数人くらい来ました。母が、あんたは疎開先があったからこういうところで生きてられるけど、みなさんはそうじゃなかったと言って、その子どもさんたちにパンを差し上げた。そういう戦後の記憶はあります。あと、JRの高架下の闇市の話ですけど。元町商店街に住んでましたから、JR越えたところにある、神戸小学校に通ってました。当時の高架下にはね、汚い汚い公園があったんです。同級生なんかと話をしますが、汚いブランコが2つくら

いぶら下がってたよ、と言いますと、いやいや滑り台もあったよと。なぜそんな汚い公園を覚えてるかと言うと、1944年、疎開直前ですけれども、戦争が始まったら、靴なんかなくなるからみなさん裸足で道を歩く練習をしましょうと先生がおっしゃって、朝学校へ行くときは、裸足で行ってたんです。運動靴ぶら下げていって、帰りは履いて帰ってもいいと。だから、汚い汚い鼠色の公園を歩いた土の感触が残ってるんですが、それで、疎開から帰って来たら、見るもまばゆいばかりの闇市の風景になっていて。子どもですから、戦争したからどうのこうのというよりも、大人の人ってこういうふうにして街を復興させていきはるんやなあ、というのが身に染みて、すばらしいなと、そういう記憶だけがございます。

村上 戦争中から疎開を経て身近な場所が大きく変わり、闇市として盛り場になっていたということですよ。闇市と言ってもいろんな角度からの見方があったことが感じられて、興味深いです。

網(哲) あのね、お饅頭作ってないとおっしゃってますけどね、たしかに売ってたんですよ(会場笑)。羽二重のものすごくおいしいお饅頭でね。戦争中やけど、やっぱり風月堂はたいしたもんやなあ、宮内庁御用達って大きな看板出てるしね(笑)。ついでに言うとな、そごうの前に「ジャンジャン市場」いうのがあってね。

村上 三宮町1丁目の北東部、いまの神戸マルイの辺りにあった飲食街ですね。

網(哲) バラック小屋の飲み屋があったんです。その時分ホステスさんはね、住むとこないから、掘って建て小屋の2階で住んでましたね。2階言うたって、板張りの天井裏みたいなところに住んどるんです。僕らがこんには言うて飲みに行くとな、こんなくらしいの四角い窓からね、下向いてね、ああお客さんやいうて、上から、足から降りてくるんです。

村上 梯子みたいなもので？

網(哲) 梯子なんかありません。

村上 (会場笑)梯子がない？

網(哲) カウンターの上に素足をのぼして、それを下から見ておったんです。

村上 想像以上ですね(笑)。

網(哲) あんなのが楽しかってね(会場笑)。早よ行かんとあかんねん。その女の子が降りてきとったらもうあかんからね。降りてくる前に行っちゃったわ。

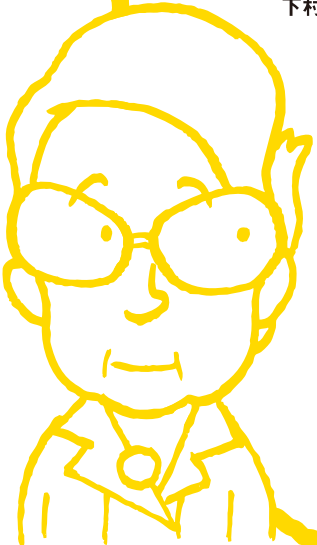
村上 なるほど。天井裏にいる間にね(笑)。

網(哲) 戦後はね、そら苦しいこともありましたけど、今までにないようなね、楽しいことがありましたわ。うちの親父がビールが好きでね、あの頃、それは戦争中の話ですわ。5時にならんと、ビール、酒類売ったらいかんことになってたんです。ちょっとだけ売ってくれるんです。僕も親父と一緒にあってね、「ブラジル」いう店が神戸駅の北側にありましてね、そこで飲んでね、5時になるまで待ってたんです。で親父が、ジョッキも何もありません、空き缶ですわ、空き缶にビールを入れてくれますねん。その空き缶でビールを飲んでましたね。でそれも今から思うと、そら辛い思いで並びましたけど、ビールが飲めるという、僕はまあ飲めませんでしたけど、親父が二杯飲んでんのを横から見ててね、今から思ったらあれも親孝行のうちのひとつかなあと思えますわ。まあ、ものが買えることは本当に嬉しいことでした。

村上 そうですよ。豊田さんはいかがですか？

豊田 食糧難はみなさんおんなじだけの食糧難で。あれは何でできたのか、最後のほうは、本当

下村俊子さん(81歳/終戦時9歳)
神戸市中央区在住。終戦時は多可郡に疎開していた。
神戸風月堂会長。終戦から1年余で元町通商店街3丁目に建てられたジュラルミン街のお店の2階に暮らしていた。



彼女たちは「フェアラゴン(Where are you going?)」
って声かけるんですよ。

に、今やったら豚もイノシシも食べないと思うものが配給されるような(笑)。だけどとかく私のところは、1946年の3月に三宮の、今の神戸で一番いい場所のそごう前に、お店を出すことができたことがとても良くて。はじめは売の商品もないんですよ。

もうとにかく店を開いて商売をしないことにはどうしようもないんですが、私のところは商売屋でやってきたので、いろんなものを人から借りたりいろんなものを並べてしていました。ところが、開店してみても分かったんですけど、すぐそばにイースト・キャンプがあったおかげで、お客さんはほとんど兵隊さんでした。はじめは言葉が分からなかったんですけど、だんだん慣れてくる。英語は、敵国語だからといって2年生で打ち切りになって、ほぼ2年間しか習ってなかったんですけど、アメリカ兵の使う英語はまったく違ってました。

それと、夕方になると、私の家の前は、隙間がないほど、パンパンガールが並ぶんです。本当にもう、ずらーっと。私は福原の近くにも住んでいたんで、遊郭というのを見ておりましたが、遊郭、遊女さんは、自分からお客さんと呼んだりはしないんですよ。遊郭の中において、やり手ばあが表に立って(会場笑)、男の人をお兄さんお兄さんと呼び止めて、中に入れていた。それが、戦後は、パンパンガールと絶対に分かるように、きれいに一列に並んで、兵隊さんを待ってるんですね。イースト・キャンプの兵隊さんも夕方になると退屈なんで、みんなぞろぞろと、そごう前の電車通り、当時は車が通ってなくて広い通りですわね。そこを歩きますと、パンパンガールたちが「私を買ってください」とばかりにずらーっと並んで、勇気のある人は言葉をかけるんです。その言葉、はじめは何を言ってるのか分からなかったけれど、この人たちは耳で覚えた英語だな、と思いました。「フェアラゴン?」って声かけるんですよ。「Where are you going?」が「フェアラゴン」になる。それで、兵隊さんはこうやっている、「ハツメルユ?」と言っている。何かというと、「What the matter with you?」ですか。なるほどこれがアメリカ兵に通ずる英語だなんていうのがありました。アメリカ兵の兵隊さんは、退屈だからうちの店へたくさん入ってくるんですけども、中にはお金で出さないで、あの頃煙草なんか日本人は手に入らなかったときに、アメリカの煙草はすごい値打ちがあったんですね。ラッキーストライク、キャメル、フィリップモリスと、それを父にOK?って言うんですよ(煙草を吸うような身振りをしながら)「煙草でもいいか?」ということ。父はもう煙草が大好きなので、(身振りをしながら)OKって(会場笑)。MPに見つかったら、怒られるんですけどもね(笑)。それで、商品売って父が煙草に変えたり。いろいろ、そういう思い出があります。

村上 そうですか。神戸でのパンパンや進駐軍の煙草の横流しについてお聞きするなんて、なかなか貴重な機会だと思いますよ(会場笑)。もっといろいろ聞きたい気がしますけれども、中野さんは、占領期の仕事としてアルバイトをされていたのですよね?

中野 戦争が終わって1、2年ごろにね。上級生に「アルバイトに行こう」言うて連れていかれましたね。神戸港の第4突堤で降りてきた進駐軍の物資、兵站と言いましたね、を近くの全館冷凍冷蔵庫の川西倉庫まで運んで行って、それをフォークリフトでパッと上げて持って行くんです。フォークリフトは初めて見て大きなショックで。これでは日本は勝てないと痛切に思いました。時々ね、悪い人がぱっと落として、運んでいたものが散らかってしまうんですね。落ちたバター、ハム、ソーセージを盗んで帰れるわけです。何か分からなかったのが、チーズです。いい匂いはするけど食べ物に見えず、石鹸かなって(笑)。で、本当に、僕ら見とってね、どれだけ戦争いうものがね、物



豊田 和子さん(88歳/終戦時16歳)

神戸市中央区在住。仏画家。著作に自身が体験した戦時下の暮らし、空襲の記憶を綴った画文集「記憶のなかの神戸 私の育ったまちと戦争」(2007年、シーズ・プランニング/星雲社)がある。終戦時は五社に疎開。終戦後は三宮で父が開店したお店を手伝った。

資が豊富でなければ戦えないか、を感じましたね。南京で日本がね、あんなことはしなかったっていうけど、あんなの嘘っぱちですよ。人間腹が減ったらね、1日食べなかったら嘘をつく、2日食べなかったらものを盗む、3日食べなかったら人を食べる、4日食べなかったら人が人を殺して食べる。あれはあの通りですわ。米軍の兵站はとても充実していました。これは戦争に勝てるはずがなかった、と痛切に思いましたですね。

村上 物資も機械も進駐のために持ってきましたからね。占領期には災害があったときに、橋が壊れたりしたら米軍が重機であつという間に直したって新聞でも報じられていました。実際に見て日本軍と違ったという中野さんのご意見は、当時から新聞や雑誌に言説として現れていましたね。では、食べ物のお話つながりで展開したいと思います。学校給食もやっぱり戦中戦後で変わっていますが、宮崎さんはどうでしょう?

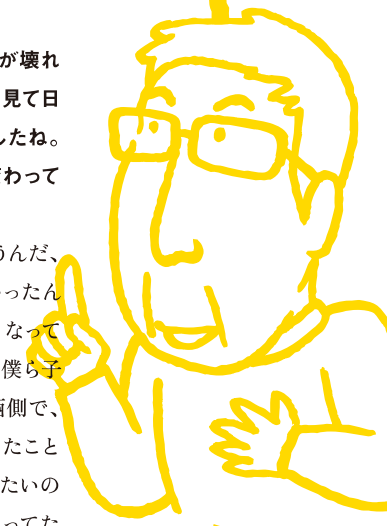
宮崎 はい。話を聞かせていただきまして、これほど戦争は大人の世界と子どもの世界とで違うんだ、とびっくりしましたね。子どもだった僕の頭の中での戦争というのは、もう飢えしかなかったんです。例えばね、淡路に行く前に、最後覚えているのは、だんだんだんだん食べ物が無くなってきて、最後は「ふすま」というのを食べてました。もう何にも食べるものなかったですね。僕ら子どもには闇市とかは全然分かりませんが、ひとつ印象に残っているのは、そごうより西側で、高架より南に、闇市よりまだ南の「ジャンジャン市場」にある時、親に連れて行ってもらったことがあるんです。そのときの僕の印象では、真っ黒けのどろどろの道で、両方にバラックみたいのがざーっと立ってるんですよ。こんなところ大人が何しにくるのかな、何が市場やろと思ってたんです。やっぱり今で言う飲み屋とか食べ物屋さんばかりで、物は全然売ってなかったです。こういうところには来たくないと思って、それ以後2度と行かなかったですね。神戸に帰って来てからはもうサバイバルみたいなものでした。

食べ物は米とかがなかったんで、メリケン粉を中心にした粉をからめたようなものだったという印象があります。僕は子どもでたらに泳ぎはできたんで、須磨の海岸でちょっと泳いで潜るとね、アサリがとれるんです。とれるっていか後で考えたら漁師さんが養殖してるんです(会場笑)。それを缶詰の空き缶を穴あけましてね、3mくらい潜ったら、砂と一緒に貝がとれるんです。石を放って海水パンツの中に入れてまてね(会場笑)、いっぱいになったら上がってきてですね、砂浜のところちょっと埋めといてね。またざーっと行くんですよ。30mくらい泳ぐと遠浅になりましてね、深くなっていくところにアサリがいました。もうちょっと行くと大きなバカガイとかもとれるんです。あとは魚釣りね、魚も一生懸命釣ってましたね。

山のほうの話ですとね、結局遊ぶところがあんまりないんで、小学校の時ですけどね、山登りにみんなで行くんですよ。それで須磨ではヤマモモがいっぱいとれたんですよ。5月ぐらいに大きなやつがとれる。これはただで食べれるんですよ。秋になったらアケビとか柿とかね、そういう野生のものを遊びながら食べてお腹に入れてました。町中を下りてきますとね、あの頃は、いちじくがよく育てられていたんですよ。よそのやつですけどね、手を伸ばしていただくんです(会場笑)。

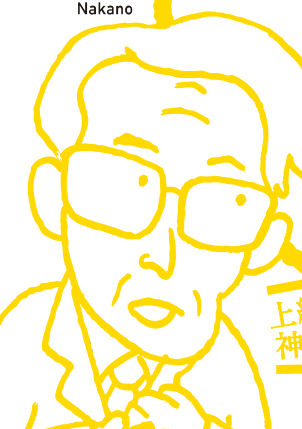
村上 食べ物の調達の仕方子どもならではの大胆さですね(笑)。

宮崎 子どもですからもう突ってるものはみんな食べて。別に怒られもしなかったですけどね。そういうので、けっこう飢えをしのいでいた。あとはね、買い出しがありました。親に連れられて淡路



Miyazaki

Nakano



上級生に「アルバイトに行こう」言うて
神戸港に連れていかれましたね。

島に買い出しに行くんですけども、市電で須磨から中突堤まで行くんですね。当時、市電は片道10円です。小学校4年生くらいまではタダでしたね。それから関西汽船に乗って塩まで行くんですよ。帰りはリュックサックいっぱいにお米を背負うんです。そうして中突堤に戻ってくると、今は高速道路があるあたりに水上警察というのがあって。びゅーっと降りていくと、何人かに一人が呼び止められるんです。荷物を持っている人へのチェックがあってね。お米が入ってたらぜんぶ没収です。ところがね、子どもはスルーなんです。だから親は仮にとられたとしてもね、先行っけ、みたいな感じで、子どもはすーっと行くわけです。そしたら子どもの分だけはお米が確保できるというようなことをやりましたね。本当に戦争というのは飢えしかなかったという印象ですね。僕らの年代では。

村上 そうですよ。子どもは自分でお金稼いで買うことはできませんからね。

宮崎 小遣いなんかなかったですね。それともうひとつ違うのはね、後になってから、僕らと同じ年代の人に話をするんですけどね、意外とね、飢えてないんですわ。ほとんどの方は疎開してたからね。悪いけどそういう印象ないのごめんなさい、みたいな感じなんです。だから、都会に居座った人がやっぱりしんどい思ってたんちがうかな、と思いますね。年代によってもすごい差があったんやと感じましたね。さきほどのビールとか、何でもお金出したらとか。僕らはどうか食べるもの落ちてないかなとか、よく映画で進駐軍にギブミーチョコレートとかってあるでしょ。ああいうのもありましたね。

村上 なるほど。お菓子をくれる進駐兵がいましたか。

宮崎 須磨におったんですけどね。ジープでばーっと来るんですよ。どっかを訪ねていくんでしょうね。僕ら子どもですから、わーっとジープを取り囲んだら、ばーっとお菓子をくれるんですよ。映画でよくあるシーンと全く同じでした。

村上 なるほど。山本さんは千葉にいらっしゃったんですよね。

山本 千葉は、闇市というのはあんまり近辺にはなくて。ちょっと離れたところにはあったでしょうけれども。やたらもう、電車に乗ったりして、買い出しに行ったりしましたけれども、その買い出しも、やっと買ってきたものを警察に没収されたりして、もうほんとに散々な目に遭いました。せっかく子どもたちがね、今日ご飯が食べられるかなと思ってるのに、食べられなかったり。闇市以前の問題で、千葉なんかは周辺に物資のありそうなところですけども、流通が悪かったんでしょうかね。もう、食べるものがなくて、芋づるだったらもう本当に上等で、「アカザ」っていう草を探して、食べたんです。今でもアカザを見るたびに思い出します。その上、終戦直後は不潔なんですよ。子どもたちだけじゃないと思いますけど、しらみだらけで。腸チフスで亡くなっていく方、餓死する方もたくさんで、もうほんとに散々でした。

そして、おかしい話なんですけども、煙草ってあんな時代でも吸いたいですかね、男性は(会場笑)。うちの父はちょっと田舎のほうに行って、栽培してる葉っぱを買ってきてね。手を加えて、刻んで、そして私巻いたりもしました。その巻く紙もね、辞書なんかの紙がちょうど煙草の紙らしきもので、小さい板を使っとうまいこと巻いて、また売ったら買いに来てくださる方もあってね。私もそれ、何の気なしに売ったりしましたね。ほんとあの当時、子どもは何をさせられたのか訳の分からんような状況で、戦争はまともな親もなくなっちゃったんだなあと思いますね。また、その頃になぜか真っ赤なザラメのようなお砂糖が、お米の代わりのようにどっさり

配給されて。まあ喜んでましたね。今お聞きしていると、早く神戸のようなところにもう2年ほど先に帰ってきたら、その闇物資で、いろいろ買えたんかなあと(会場笑)、ほんとに残念です。

村上 物流はもう本当に各地域によって事情が違いますからね。神戸はどちらかというと豊富な、集まってくる場所なので、手に入りやすかったのかなと思いますね。

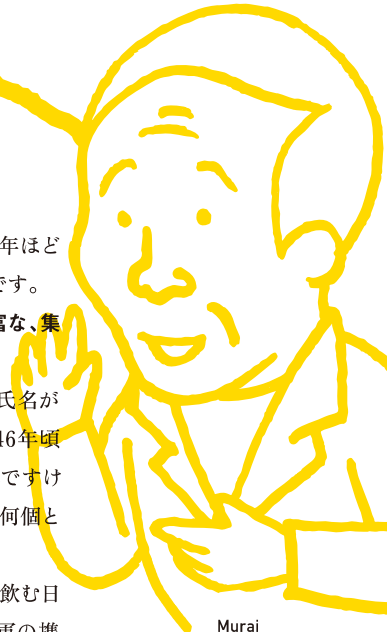
村井 みなさんご存知のように、食糧が当時は配給制ですので、米穀通帳というのに家族の氏名が列挙されていて。その証明書で食糧を受け取るんですけども。播州赤穂におった1946年頃に食糧営団から米の代わりに小麦粉が配給になりましたね。そのまま食べてもいいんですけど、ちょっと手数料を足して依頼したらコッペパンを作ってくれるんです。目方によって何個と決まっていて、何回かお使いに行っただけです。

また、終戦後は学校給食として今のような制度はないので、脱脂粉乳をぬくめたものを飲む日があったり、ココアの固まったルーをそのまま齧るということがあったり。ある時は、米軍の携帯用の野戦食糧をくれました。 蠟引きの防水にした箱の中にいろいろ入っていたのは、チョコレートとチューインガムが少しと、クラッカーかビスケットが4枚、一回使いきりの石鹸とティッシュペーパーと、煙草4本とマッチが入ってた。一箱くれて給食代わりに学校で食べるんですよ。そしたら煙草やマッチが出てきましたから、先生がとりあげて。

村上 開けてみるまで分からなかったんでしょうね。

村井 英語で来てたんですよ。そういうこともありましたけど、給食は止まっていた期間のほうが長いです。戦時中のほうがきちっとしてました。みなさん学校給食は戦後に始まったと思われている方が多いと思うんですが、実は1944年から始まっていました。私が1年生に入ったときからです。コッペパンとみそ汁お椀一杯が毎日、給食として出るんですね。パンは家に持って帰ったらいけません、学校で食べて帰りなさい、と言われて。子供の健康や体力の問題で。警戒警報が鳴って避難して学校帰るときは、持って帰ってもよろしいと。ようみんなごまかしてね、パン半分ばこつと割って、お椀の中に入れて持って帰ったり、しておりましたね。

村上 ありがとうございます。お話が充実していて収まりませんが、そろそろ次のテーマに進めたいと思います。



Murai



Nakano



Yamamoto

疎開先では戦後も食べるものがなくて、芋づるだったらもう本当に上等で。

Theme 03 “進駐軍”



①:1948年の米軍撮影空中写真にみるイースト・キャンプ

村上 第3部のテーマは「私が見た進駐軍兵士と施設」です。

まず、神戸に進駐した連合国占領軍のキャンプと接收について紹介します。

1948年の三宮界隈の空中写真①を見てみましょう。JRの三ノ宮駅からKIITOと税関まで、南に続くフラワーロード東側から生田川までの広大な土地が接收されて「イースト・キャンプ」とされました。焼け残ったそごうの南側の臨港線の手前、今では阪神高速が通っているところまで、柵で囲まれたイーストキャンプだったわけです。これは1945年の年末になっていきなり、この場所にイーストキャンプを置くぞ、と占領軍が言い出して、葺合区役所が被災者に立ち退くように言うわけです。先ほど話題に上がったように、戦前に山本さんの家があった小野中道商店街は、そごうの南側から生田川まで続く立派な商店街として存在しました。それが接收地の端っこになってしまい、金網の向こうにいわゆる「カマボコ兵舎」②が建てられ、元居た場所に戻ってこれなくなりました。ちなみに小野中道商店街③は従前、フラワーロードから生田川まで百数十件も連なる市内有数の商店街で、今では知らない人も多いですが、元町商店街に匹敵するくらいの規模でした。まずは空襲の際に、できたばかりのそごうに燃え移っては困るということで、北側が引き倒されたりするわけですね。戦時の金属供出で、すずらん灯なども全部持っていかれたあとに、南側がもう全部キャンプになってしまい、再建できなかったというわけです。

新開地にも「キャンプ・カーバー」がありました。1946年の新開地本通りの写真④を見ると、倶楽館を目印に、新開地本通りが再建されています。この東側にも、キャンプが見えます。これが「キャンプ・カーバー」「ウエスト・キャンプ」と呼ばれた黒人兵の宿営地で、多聞通の北西側の倶楽館から撮ったと思われる写真では、その広さがわかります。

占領軍の施設はたくさんありましたが、たとえば、六甲ハイツやライフルレンジ、アメリカ文化センター、PXなどが例に挙げられます。他にも、占領軍将校の家族が住む「ディペンデントハウス」として「六甲ハイツ」が現在の神戸大学文理農学部キャンパスに建てられました。塩屋の「ジェームス山」も六甲ハイツと機能は同じで占領軍将校の家族住宅です。それらが置かれた背景というと、これだけ戦災消失区域の広い神戸では建物が残ってない、そこに兵士は宿営する土地、将校とその家族は住宅を確保する必要があったわけです。そこで、新築で建てたのが六甲ハイツ。既に昭和初期にイギリス人貿易商のジェームスが建てていた洋館50棟余が焼け残っていて、米軍が使えるような、住むのに足りるような設備のある建物を接收したのがジェームス山。なので、どの建物にするかは選ばれているはずですけども、基本的には占領軍の定めた立地と設備のよい建物そぎ接收するというのが、当時の方針です。

1948、49年頃の六甲ハイツのカラー写真⑤があります。所蔵者に見せていたときにはあまりにも別世界のようで驚きましたが、事前の聞き取りでも六甲ハイツの話が出て、屋根に色がついていと聞いたんですね。こんな色だったの

⑤:1947-49年頃 旧トアホテル(オリエンタルホテル)から三宮・元町市街地を望む(米軍兵士撮影、衣川太一所蔵)



②:イースト・キャンプの兵舎 (U.S. Army Soldier撮影, Hiro Nagano所蔵)

③:1935年12月 小野中道商店街 (商工省商務局「神戸市商店街二関スル調査」1936年)



④:1946年11月の米軍撮影空中写真にみるキャンプ・カーバー

か、と写真の威力を感じました。

武庫離宮跡、現在の須磨離宮公園は「KOBÉ RIFLE RANGE」と看板が掲げられて兵士が立っていました。そして中では斜面に向かって射撃訓練をしている写真⑥がアメリカの公文書館で見つかりました。

三宮の東遊園地も接收されて、「Clarkson Athletic Field」「Parade Ground」と呼ばれていたようです。そこやイースト・キャンプ内のグラウンドでは、全部隊集合のパレードが行われている写真⑦も残っています。

また、大丸百貨店の東側の写真⑧もありますが、大丸は、地下1階～3階までが1952年までと長く接收されていてPXだったんですよ。上の階は接收解除になっていても、下の階はずっとPXだったので、その印象がすごく強い方も多いんじゃないかと思います。大丸の記念誌では、この東側の外壁の色は「暗紫色」だったとされています。戦時中の防空迷彩のために暗紫色に塗ってそのまま接收されてしまい、改修も改装もできなかったのが接收解除になって、ようやく1952年の7月に全館オープンでタイル張りにしたと書かれていたりします。

旧トアホテルは占領期には「オリエンタルホテル」になりました。そこから三宮・元町方向を望む写真⑨では、モスクを目印に、山手のほうは立派な建物が残っているのが見えますが、それらも接收されたものを多く含みました。やっぱり戦災と占領の影響は、神戸のまちの戦後にとって大きかった、と言えるでしょう。

さて、みなさんにもお話しいたしましょう。さっき既にお話いただいた豊田さんは『記憶の中の神戸』という本を2007年に出されています。進駐軍についても書かれていて、意外と良かった、という話も出ていますが、イースト・キャンプもウエスト・キャンプも記憶があると及言されていて、カマボコハウスが並んでいたということも言われています。

そういうお話も含めて聞きたいと思います。

⑥:KOBÉ RIFLE RANGEと掲げられた武庫離宮跡 (現・神戸須磨離宮公園) (米国立公文書館所蔵)



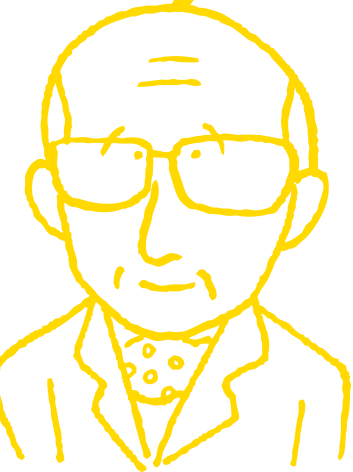
⑧:大丸東側で整列する米兵たち (米軍兵士撮影、衣川太一所蔵)

⑦:複数部隊によるパレード風景 (米国立公文書館所蔵)



⑤:1948年頃の六甲ハイツ(米軍兵士撮影、衣川太一所蔵)





Tsuna (Tetsuo)

綱(哲) 東のほう(イースト・キャンプ)は白人兵でね、西のほう(ウエスト・キャンプ)は黒人兵でした。多聞通に住んでましてんだけど、黒人兵がたくさんおりました。着てるもんが立派で、ジープで乗り付けてきてね。戦中にニュース映画で見た日本兵がどろどろで中国で戦うてはるのと、えらい違いなんです。やっぱり戦勝国はたいしたもんやなあ、と。うちのおばあさんは当時7、80才ぐらいで初めて黒人を見て、珍しい珍しいって一生懸命窓から見てました。毎日見るもんやから、前を通る黒人兵が「ヘイ、ババサン、ババサン」って手を振るんですよ。夏の暑いとき、8月で、おばあさんはうちわで答えてました。

そのうちに、黒人兵が2人ほど来て、見る前でタップダンスを踊ってくれるんですわ。あの頃、車の通行もあんまりなくて道が広がったから、道路の真ん中でね。で、疲れるとウイスキーのポケット瓶をポケットから出してがぶ飲みするんです。空っぽになったらそれをパーンと道に放って、またあっちの方へ行きまされたけれどね。

また、わりあい高級のパンパンさんがおましてね。焼け残った家の4畳半か6畳か、昼の家を借りて自分の商売の拠点にしてね、黒人兵を招いてました。で、帰り際に、僕が歩いてたら、パンパンさんが呼んでね、この黒人兵に「もういっぺん来てちょうだい」って言うてちょうだいよ、と。おぼつかない英語で「Please come again!」と言ったりしました。だから僕は白人兵はあまり知りませんが、黒人兵はわりあい親しみがあってね、なんか人間的に良かったんですよ。ただね、あの頃、日本の道路はこんなふうでなかったんです。

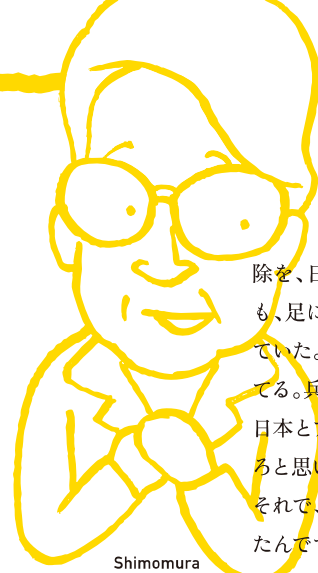
進駐兵が来た頃、2人ぐらいがジープに乗ってましてね。今となると当然分かるんですけども、道路をまっすぐ走ってくるんですよ、ジープが四輪駆動で。それを人が避けんとあかんのです。今のように車が避けて通るなんてなくて、進駐軍のジープはまっすぐ来るんです。

僕が見てるときに、お母さんが子どもの手引いてね、歩道はなくて道の脇に避けて立ってたんですけれども、ジープがちょっと当たる距離にいて。それを避けずにボンと当たってしまったも、あの頃救急車呼ぶこともないしね。その母子をジープに載せて走り去ったから、ウエストキャンプの黒人のほうの病院に連れていったんだと思いますけどね。あとは、家の前をよう黒人兵のトラックが通るんですよ。

ある日、メリケン粉をドンゴロス(麻袋)にいっぱい積んだのが通ってね、ひとつ大きなのをどーんと落としていくんです。おふくろが通るたびにトラックを止めて「これ落としてる」て日本語で言うんやけど、向こうも分からへんもんやから、いつまでたっても拾っていかへんのですわ。あんまり拾っていかへんから、そしたらもろとこか、いうことになって(会場笑)。もらいましてん。ドンゴロスにいっぱいメリケン粉をね、向こうは落ちたらもう拾わないやね。

あとはしらみがわいてみんなひっつかまえてDDTをかけるんですわ。おふくろは、今でいうプライドがあったんやね、アメリカ兵にひっつかまえて、DDTの粉を粉屋の小僧みたいにばーっとなるのは嫌や、いうて逃げましたわ。僕も。今から思うと一種の敗戦国であったって、そのくらのプライドは持ったんですよ。

豊田 進駐兵の兵隊さんは本当に明るくて、優しい人が多かって、日本の兵隊さんよりずっと優しいなと思いました。囚人の兵隊さんの背中には、PrisonerのPという大きな字が背中いっぱい書いてあるんですわ。その囚人を、MPが背中に銃を突き付けて手錠も何もかけずに、そごうの前の道をお散歩させるんですわ。私は小学校の時に湊川小学校のそばの警察の官舎の大掃



Shimomura

元町のジュラルミン街のお店の2階に住んでましたから。

除を、日本の囚人がお手伝いするのを見てきたんですけどね。囚人の服着た人が掃除する間も、足に鎖とボウリングの玉のような、大きな鉄の玉を足にぶらさげて、逃げられないようにしていた。それに比べて、進駐兵は手錠も何もかけずに、背中に銃を突きつけたまま平気で歩いてる。兵隊さんは兵隊さんで”P”と書かれてても、女の人が通ったら口笛を吹いたり、やっぱり日本とアメリカって違うんだなと思いました。こんな国と戦争してたんだなっていうのをいろいろと思ひ知ることがいっぱいありました。

それで、アメリカ独立記念日の1946年7月4日に東遊園地でアメリカ軍主催の花火大会があったんですわ。それはほんとに戦争中花火なんか私が見たことないし、打ち上がるのもすごいと思いましたけど、最後に仕掛け花火があるんですわ。ぱぱぱぱと両方から花火が飛んで、真ん中に日の丸の旗とアメリカの旗が映し出されたときは、なんかすごく嬉しいというか、感動しました。

村上 東遊園地の花火の話が出ましたが、当時日本人は普通に入れたんですか？

豊田 いや、ハワイから来た通訳の人が連れて行ってくれたから入れたのかもしれない。一般人が入れたのかはわかりませんが、とにかくその人に連れて行ってもらいました。

中野 僕はね、イースト・キャンプとか自分の眼で見てきましたけどね。「進駐軍」というのは違って「占領軍」なんです。武力でもってアメリカに押さえつけられたし、いまなお基地はありますし、日本はこのままだと大変やと思いますね。

村上 今日のスライドや配布資料では「進駐軍」という言葉を括弧つきで使っているように、私も「占領軍」が正式な名称で、「進駐軍」というのを補足なしに使いたくはないと考えています。

当時はGHQ側の発表や公式文書の和訳には「(連合国)占領軍」と書かれていましたが、連合国占領軍への否定的感覚を和らげるためにと、日本政府と報道機関がGHQから指導されて「進駐軍」が用いられるようになったそうですね。私たち後の時代の者は、メディアに伝えられ、書かれたものを読んで勉強しますので、「進駐軍」をもう当たり前だと刷り込まれてしまっているという背景があります。

山本 私はね、神戸の方のように、大々的には見ていないんです。縁故疎開していた千葉市のあたりはね、進駐軍のジープが通るだけでみんな、長い間、見るというよりも慌てて逃げ込んでました。

村上 普段はあまり見かけなかったのでしょうか。

山本 いや、ジープが通ることは通りましたね、田舎道でも。でも、そしたらみんなもう恐ろしがって、畑をやっている人なんかも逃げ込んでました。だから私は神戸に帰ってきてからもちらほら見るだけで。ましてや私には本当に、住んでいた小野中道商店街に戻れなかった恨みがありますので、もう進駐軍など見たくもないという感じで過ごしていました。

下村 元町通の夜のことでですけど、連合軍のね、特に水兵さんなんかはとって素敵でした。4、5人並んで、きれいにハモって歌って、元町通商店街の西から東に向かって歩いて。私は元町のジュラルミン街のお店の2階に住んでましたから、窓を開けて眺めていました。水兵さんにとっても素敵だったという印象はあります。

村上 戦後、元町通3丁目にできたジュラルミン街は全国的に有名でした。空襲を受けている最中に川西航空機甲南工場から神戸松蔭高等女学校へ疎開させた航空資材、ジュラルミンの払い下



Toyoda

げを受けて、1946年末に共同店舗(木造)を建てる際の外装に利用したそうです。

村井 意外に知られていないんじゃないかなあということの一つは「RTO」といって、進駐軍の鉄道輸送をする司令部のようなものが東京にあったでしょう。その出先が、たしか三ノ宮駅だったか神戸駅だったか…。その1階の1、2等待合室を改造してそこに事務所を置いて、米兵が勤務していました。当時は朝鮮戦争の最中で、東から西へ佐世保に向かう、なんとかエクスプレスというニックネームがついてるんですね。

村上 三ノ宮駅ですね。進駐軍専用列車ということでしょうね。

村井 私は一回だけ走ってるところを見ました。暗い冬の寒い夜にね、三宮のホームの下り方向に長いこと止まっていた。信号かなんかを待ってたんでしょうね。そしたら車内では窓を開けばなしてね、スチーム暖房でがらがら暖めて、シャツ一枚で兵隊がおるんですわ。

当時の日本の電車には暖房なんてなかったから、冬は寒いものでしたね。なんとまあ贅沢なことをしてるんだと、非常に印象に残りましたね。もう一つは「アメリカ文化センター」がありましたね。居留地の北側の3階建のビルの生田警察署の西向かいくらいにあった木造の建物がそうでした。日本人にPRをする場所だったんでしょうね。

私は小学生で、友達誘って行っていました。英語はもちろん知りませんから本は読めませんが、『LIFE』とか『TIME』とかいう写真雑誌がたくさん置いてあるんです。それを見るのがおもしろくて、ちょくちょく行きました。いつまであったんでしょうかね。

あとは柳筋、今のセンター街では、アメリカの兵隊さんが晩によくケンカしてましたわ。酔っばらって殴り合いするんですよ。

村上 飲み屋が多いところでよくケンカが起きるといのは日本人同士と変わりませんね。柳筋は三宮町3丁目でしょうか。

村井 そう、大丸の北側あたりが当時の家からすぐでした。誰か連絡したらMPが飛んできて、引き分けて。MPも殴ってましたよ(笑)。ちょっと怖かったですね。兵隊さんの居住区や神港ビルに近くて。

宮崎 占領下は中学生くらいで、須磨の離宮道の下のほうに住んでました。射撃場があったんですけども、そのあたりは僕らの遊び場だったんです。

普通の時はドンドンと射撃の音が出てね、ちょっと危なくて近寄れなかったです。でも、そういう射撃音がない時に子どもながらに「怖いな」思いながらも、射撃のところに入っていたんです。そこで何をしたらかという、今やったら犯罪になると思いますけど、いっぱい落ちてたライフルの葉莖を拾ってきて手製のピストルを作りましてね。当時は煙硝(硝酸カリウム)がおもちゃ屋さんで売ってたんですよ。ピストルでパーンとやるようなやつがね。それをたくさん買ってきてバラして、行李傘の柄を切って、そこに葉莖を突っ込んで、鉛を焼け跡から拾ってきて溶かすんですよ。竹とかいう竹のなかにそれを流し込みますとね、ちょうど直径2mmくらいの棒ができるんです。それをペンチで切って上から入れたらピストルになる。

ものすごい勢いがありましてね、雑誌とかベニヤ板は貫通しましたね。中学生くらいの時にそういう遊びをしてました。そういう悪ガキやったと思います。

村上 それは危ない遊びですね。近くに武庫離宮の射撃場があるという立地が大きな要因になったんですね。

宮崎 今思えばそれが悪かったですね(会場笑)。

もうひとつ、イースト・キャンプにうちの家は取られてたんですね。小学校くらいの時、そこは営業していて最上階に食堂がありました。小学校の友達にお父さんがドイツ人の子がいて、一緒にそこに連れていってもらったんですよ。その時にソフトクリームを食べさせてもらって、こんなもん世にあるんかいないうくらいうまかった。

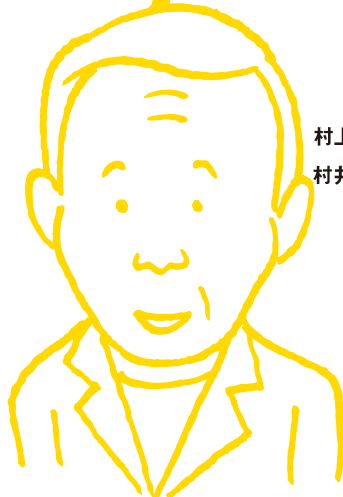
ついでに上からイースト・キャンプを見ながら、うちはあの辺の家やったのかなあ、なんで早いこと返してくれへんのかなって、そういう複雑な気持ちがありましたね。あとは、中学時代にアメリカに染まってましてね、大丸前で洋画ばかり観てたんですよ。学校終わったらすぐに映画館。当時は3本立てで50円なので、家から70円持って映画観に行くんです。大丸前までの行き帰りの市電で10円ずつ払って映画で50円払ってね。3本立てですから、4、5時間で夜8時ごろまで観てるんです。ある時に帰ろうと思ってポケットにぱっと手を突っ込んだら10円がないんですよ。たぶん僕の場合は映画館で60円払ってその時返してくれへんかったのかなと。今やったらどっかおばちゃんに頼んで10円貸して言えたんですけど、その知恵はなかったですね。須磨の家まで歩いて帰ったんですよ。

村上 すごい距離ですね。夜中ですから親御さんが心配したでしょう。

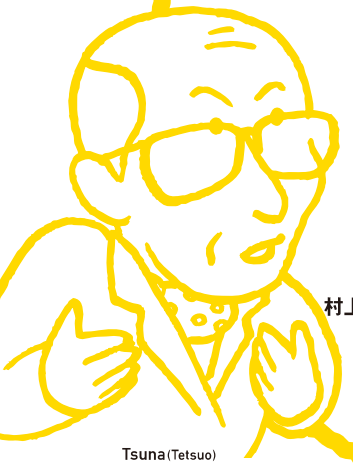
宮崎 もう4時間歩きました。家帰って怒られましたよ(笑)。それでも映画観るのはやめられなかったですね。僕は今日の話は今までずっと、70年間したことがないんです。初めてです。僕は当時アメリカとの戦争で怖いと思ったことはないし、米兵に乱暴されたこともなかった。でも、だんだん最近になって米軍が攻撃の前にすべて空中写真を撮っていると、日本人全員を戦闘員と考えていたとかいう史実を知るようになってきました。

村上 今日初めて、70数年口にしなかったことをお話して下さったと、今の宮崎さんのお言葉もありましたが、これまで空襲の話、終戦の話はされても、そのあとの戦後の経験・記憶まで含めて一体に語られることはとても少なかったと思うんですね。なのでやっぱり、今からでも、話して、しかも語り継いでそして記録化していかないと、状況がよく分からなくなってしまいます。占領されたという記憶すらなくなって、なんか戦争には負けたみたいだね、みたいな感覚になってしまうのはよろしくないという気持ちがあり、このような会を開きました。みなさまありがとうございました。ゲストに拍手をお願いいたします。

イースト・キャンプを見て、なんで早いこと
うちを返してくれへんのかなって、
複雑な気持ちがありましたね。



Murai



Tsuna (Tetsuo)



Miyazaki

開催風景

トークは大いに盛り上がり、予定の時間を30分も超過してしまいました。しかし、会場に集まった参加者のほとんどの方が最後まで席を立つことなく、熱心に耳を傾け、時に笑い、驚き、頷く反応を見せてくださいました。



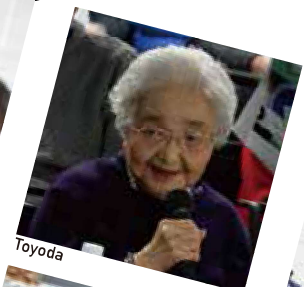
Murakami



Serizawa



Shimomura



Toyoda



Murai



Miyazaki



Nakano



Tsuna (Tetsuo)



Tsuna (Chiyoko)



Yamamoto

参加者の声(アンケートより抜粋)

- ・戦前もGHQの時代も、それらについて語られることも、捉えられることも、現在の意味から想起されている、変わりうる歴史なのだなと思いました。
- ・終戦から占領期の神戸の様子が写真などを交えて分かりやすかった。なかなかこういったテーマの話は聞くことがないので興味深い内容でした。
- ・自身が子供のころに経験した記憶を、子孫に伝えていきたいと思った。
- ・GHQの跡地の碑ではありませんが、神戸駅南に再開発完成の碑でGHQに触れているものがありました。
- ・私的な話が貴重であり、楽しくもありました。
- ・5歳の頃に須磨区で神戸空襲を体験。天井川でたくさんの方が死んでいた情景などでもリアルですが、体験者がなくなる現在、今日のような学習内容や写真や資料をきちんと保管して引き継いでいく平和資料館が神戸にも必要だと感じました。阪神・淡路大震災とともに、1947年、小学校入学時、履物は、靴は配給でなく下駄、ぞうり。ドンゴロスのズボンで登校。今日のお話を聞いて、買い出しのことなどいっぱい思い出しました。
- ・占領下の神戸で暮らしていた人たちの話を直に聞いて、良かった。年代や地域によってそれぞれの生活状況の違いも分かった。市民一人一人が戦前戦後の総括を、というのは必要だなと思いました。
- ・こういう会が、今後の平和につながることを期待している。

終わりに

「戦後の暮らし」を記録した資料や、当時の思い出のものをお持ちですか？

村上しほり & KIITO

今回、公開ヒアリングの協力者8名にお話しいただいたような「戦後の暮らし」を記録した資料や、当時の思い出のものをお持ちですか？

例えば、村井さんからお預かりした「Tokyo PX」と書かれているPXで使われていたであろうコイン。PXのおつりと思われる第8軍のマークが入っているものです。また、参加者として来場くださった吉田昭彦さんからも、日本の皆様、と書かれたボツダム宣言の現物ビラ、神戸市職員だった父が神戸市の都市計画図を作成した時の手書き書類、聖歌隊のメンバーとして活動されたときに貸与された(持出し禁止だったそうですが)というウエスト・キャンプの中の教会で使用された聖歌集など、貴重なものをお持ちだというお話をうかがいました。写真もみなさまから見せていただきました。

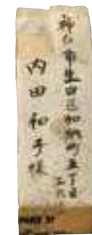
KIITOでは、講師とともに占領期の神戸に関するリサーチや催事を引き続き行っていく予定です。もし、占領下の神戸の記録や、当時の記憶、何か残していきたいと思うものをお持ちならば、ご連絡ください。次世代に引き継ぐために使わせていただきます。

【連絡先】

デザイン・クリエイティブセンター神戸(KIITO) 神戸スタディーズ担当
TEL 078-325-2235 / FAX 078-325-2230 / E-MAIL event@kiito.jp
651-0082 神戸市中央区小野浜町1-4 デザイン・クリエイティブセンター神戸1F事務所
必ず、件名に「神戸スタディーズ占領期」と明記ください。



米第8軍のPXのコイン
(村井勝さん提供)



昭和21年に
豊田和子さんが
受けとった
検閲を受けた手紙



1946年 元町通3丁目に完成間近の「ジュラルミン街」は“戦災復興の象徴”と称された。(米軍兵士撮影, 衣川太一所蔵)

「神戸スタディーズ」とは？

「神戸ってどんなまち？」と聞かれて、あなたはなんと答えるでしょうか。
さまざまに語られる神戸というまちのイメージをあらためて考えるため、
多様な専門分野の方を講師に迎え、これまでなかった視点で神戸を見る「神戸学」をつくる試みです。

これまでの神戸スタディーズ

- #1 神戸レイヤーマッピング
- #2 地-質からみる神戸
- #3 垂直の空間性からみる神戸 ～大阪湾と播磨灘の水の文化を中心に～
- #4 "KOBE"を解すーせめぎあいにもみる神戸の都市史
- #5 神戸港からの眺め

講師

村上しほり

都市史・社会史研究者



1987年生まれ。2014年神戸大学大学院人間発達環境学研究科修了。博士(学術)。GHQ占領下神戸の戦災復興と社会・空間構造について研究。その成果として『神戸開港からの復興』(慶応義塾大学出版会)近刊。共著に『盛り場はヤミ市から生まれた』(青弓社、2013年)など。現在は、占領期の語り継がれなかった地域の形成経緯と変容の契機について調査研究を進めている。

モデレーター

芹沢高志

デザイン・クリエイティブセンター神戸
センター長



1951年東京生まれ。89年にP3 art and environment を開設。アサヒ・アート・フェスティバル事務局長(03～16年)、横浜トリエンナーレ2005キュレーター、別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」総合ディレクター(09年、12年、15年)、さいたまトリエンナーレ2016ディレクター。

神戸スタディーズ#6

「“KOBE”を語る GHQと神戸のまち」

執筆・編集 村上しほり

発行 2018年3月

アートディレクション 上田英司(シルシ)

グラフィックデザイン 鈴木輝、羽田野令也(シルシ)

制作・発行

KIITO:

DESIGN AND CREATIVE CENTER KOBE

デザイン・クリエイティブセンター神戸

〒651-0082 神戸市中央区小野浜町1-4

TEL 078-325-2235

<http://kiito.jp/>

本書の無断転写、転載、複製を禁じます。
© 2018 Design and Creative Center Kobe.

